2002年度　事業の概要

1 調査と研究 …… 26
飛鳥藤原京の発掘調査 …… 26
平城京の発掘調査 …… 26
文化遺産研究部の研究活動 …… 27
●建造物研究室の調査と研究 …… 27
●歴史研究室の調査と研究 …… 28
●遺跡研究室の調査と研究 …… 28
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 29
●遺物調査技術研究室の調査と研究 …… 29
●遺跡調査技術研究室の調査と研究 …… 29
●古環境研究室の調査と研究 …… 30
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 30
●保存修復工学研究室の調査と研究 …… 31
●文化財情報研究室の調査と研究 …… 31
●国際遺跡研究室の調査と研究 …… 31
国際学術交流 …… 32
●中国社会科学院考古研究所との共同研究 …… 32
●遼寧省文物考古研究所との共同研究 …… 32
●河南省文物考古研究所との共同研究 …… 32
●韓国国立文化財研究所との共同研究 …… 33
●異なる気象条件下における不動産文化財の発掘技術及び保存に関する調査研究 …… 33
●炳霊寺涅槃塑像の保存修復に関する共同研究 …… 34
海外からの主要訪問者一覧 …… 35
海外からの招聘者一覧 …… 36
海外渡航一覧 …… 37
公開講演会 …… 40
第90回公開講演会 …… 40
第91回公開講演会 …… 40
発掘調査現地説明会 …… 41
研究集会 …… 41
文部科学省科学研究費助成研究 …… 42
学会・研究会等の活動 …… 45
文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等 …… 46
●平城宮跡の整備 …… 46
●藤原宮跡の整備 …… 47
●キトラ古墳の予備調査 …… 47

2 研修・指導と教育 …… 48
埋蔵文化財センターの研修と指導 …… 48
京都大学大学院の教育 …… 48
奈良女子大学大学院の教育 …… 48

3 展示と公開 …… 50
飛鳥資料館の展示 …… 50
平城宮跡資料館の展示 …… 50
解説ボランティア事業 …… 51
図書資料・データベースの公開 …… 51

4 創立50周年記念事業 …… 52
飛鳥・藤原京展 …… 52
国際シンポジウム「東アジアの古代都城」 …… 53
公開シンポジウム「古代建築研究の新たな展開」 …… 53

5 その他 …… 54
刊行物・データベース等 …… 54
人事異動 …… 57
予算等 …… 58

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、2002年度に計13件・4805㎡の発掘・立会調査を実施した。うち、藤原宮の調査が4件・2124㎡、藤原京の調査が2件・1320㎡、飛鳥地域等の調査が7件・1361㎡である。主な調査は以下の通りである。

藤原宮の第120・125次調査は、それぞれ朝堂院東第二堂の北半部と南半部および東面回廊と東門を対象とした。その結果、東第二堂は、①梁行5間（10尺等間）、桁行15間（14尺等間）の規模の礎石建物で、当初梁行4間で計画されたものが早い段階で変更となり5間で築造されたこと、②東第一堂とは側柱筋を揃え、いずれも梁行50尺の規模であること、③棟通りにも柱がたち、床張であった蓋然性が高いことなどが明らかとなった。また、東門は東面回廊のほぼ中央に取り付く八脚門で、桁行3間、梁行2間（柱間17尺等間）の規模を有し、従来知られている藤原宮城門より一回り小さいことが判明した。

藤原京の第123次調査地は右京八条一坊西北坪にあたり、過去、北・東隣接地で飛鳥藤原第90・101次調査が実施された。今回はそれらの成果を受けて宅地内西部の様相を明らかにすることを目的とした。その結果、以前に検出した諸施設と柱筋を揃える、計画的に配置された総柱建物を検出、倉庫として宅地の一画を占めていたことが判明した。

藤原京の第124次調査地は左京六条二坊にあたり、一部は藤原宮南辺にまたがるもので、六条大路北側溝、藤原宮南面外濠および南面大垣などを検出。北側溝SD2915については、過去の調査成果との比較検討により、少なくとも直線として施行されていないことが確認された。

飛鳥地域の調査は、山田道（第121次）、石神遺跡（第122次）、キトラ古墳（第126次）などがある。山田道の調査は、県道橿原神宮東口停車場飛鳥線改良工事に伴う一連の調査の一つで今回が9次目。これまでと同様、明確に古代の山田道と関わる遺構は検出できなかったが、9世紀以降に埋没する石組護岸施設を有する東西溝が確かめられた。

石神遺跡の調査（石神遺跡第15次）は、昨年度および一昨年度に検出したA期（斉明朝）の北限施設と考えられる東西石組溝・東西塀の北側を対象とし、北限を確定することを主たる目的とした。その結果、A期では北限施設の北に沼沢地が広がることが確認され、北部における中心施設の範囲が確定した。また、B期についても、溝が検出されたが顕著な建物は見つからず、建物群の北限を推定できることとなった。今回は、これまでの点数をはるかに上まわる木簡が出土し、注目すべき内容のものが多い。現時点で木簡320点以上、削屑700点以上で、交通関係・仕丁関係・日ごとの記録簡・歴名簡などの文書木簡、国－評－五十戸という行政区分を示すものでは最古となる「乙丑年」（天智4年,665）の年紀をもつ荷札木簡、現存最古（持統3年,689）の具注暦木簡などがある。この具注暦木簡は、元嘉暦を記した実物としては現時点で唯一のもので、古暦学・古天文学にとって重大な意義を有する。

以上の詳細は、『奈良文化財研究所紀要2003』を、またキトラ古墳については本概要別項も参照されたい。

なお、発掘調査にともなう現地説明会を実施した。実施年月日、担当者は、以下の通り。

飛鳥藤原第120次（藤原宮朝堂院東第二堂）
　2002年7月20日　　市　　大樹
飛鳥藤原第122次（石神遺跡）
　2002年11月23日　石橋　茂登・市　　大樹
飛鳥藤原第125次（藤原宮朝堂院東第二堂）
　2003年3月15日　　渡辺　丈彦

平城京の発掘調査

平城宮跡発掘調査部が2002年度に実施した発掘調査は、平城宮跡2件、平城京跡11件の計13件である。以下、主要な調査成果の概要を述べる。

平城宮第一次大極殿院西楼の発掘調査（第337次）は、2001年度にその存在を確認した西楼について、その基礎部分及び地下構造を解明するための調査である。西楼は東西5間南北3間の総柱建物で、外側の16本の柱を掘立柱、内側の8本の柱を礎石建にするという、東楼と同様類例の少ない構造をとる。断割調査の結果、基本的な基礎構造は東楼と一致することを確認したが、外側の掘立柱の1基は、後に礎石建に改修していることが判明した。また、16基ある掘立柱の抜取穴のうち13基からは、計1500点に及ぶ木簡が出土した。西楼解体を含む第一次大極殿院地区のⅡ期への改造に伴って廃棄されたものとみられる。また、第一次大極殿院南面築地回廊基壇造営に伴う遷都当初の整地土から「和銅三年三月」の年紀のある木簡が出土し、第一次大極殿院の造営過程・時期を考える上で重要な知見を得た。

平城宮第二次朝集殿院東地域の発掘調査（第346次）は、奈良時代前半の朝集殿の区画施設を解明するための調査である。朝集殿は奈良時代後半には築地塀で囲まれた院を構成するが、藤原宮ではこれまで朝集殿を囲む区画施設は確認されておらず、奈良時代前半の平城宮の状況の解明が課題であった。調査の結果、この地域の区画施設についていくつかの新しい知見が得られつつあるが、なお調査は継続中であり、詳細は次年度に譲ることとする。

興福寺中金堂院回廊東南部の発掘調査（第347次）は、興福寺第Ⅰ期境内整備事業にともなう第5年次の調査である。調査の結果、東面回廊と南面回廊の基壇、基壇外周の雨落溝や石敷、東面回廊に開く門と階段を検出した。この門は文献に記載のある楽門で、門の位置が回廊建設の基準として用いられ、東西金堂や中金堂院内庭部石敷などの位置とも設計上重要な関わりがあることが明らかになり、伽藍配置の設計の問題を考察する重要な素材を得ることができた。

興福寺一乗院の発掘調査（第350次）は、奈良地方裁判所庁舎建て替えに伴う事前調査で、既存建物部分及びその周辺について実施した。その結果、江戸時代初期寛永の大規模火災の痕跡を庁舎周囲で確認し、その下層では一乗院創建以前の奈良時代後半から中世・近世に至る連綿とした土地利用が明らかになった。また、一乗院の園池への給水方法について、従来は春日山麓の水谷川から川水を引いてきたと言われてきたが、これまで鑓水と推定してきた遺構が実は池の手前で途切れており、池の水は寝殿の東側に存在した「泉水」と呼ぶ井戸状の遺構から供給されていた可能性が高いことがわかった。

旧大乗院庭園の発掘調査（第352次）は、（財）日本ナショナルトラストによる保存整備事業の一環で、8年度目となる。今回は西小池のうち、南池の北岸及び東岸、中島（ヲシマ）の東半、中島から橋によって結ばれた小島と対岸部、東大池と西小池を結ぶ流路の西岸にあたる嘴状の岬などを調査した。その結果、絵図から予測された位置にこれらの遺構を検出し、絵図の資料的価値の高さを改めて確認した。また、ヲシマから連なる小島と嘴状の岬のあり方が、桂離宮松琴亭前の天橋立と洲浜の意匠に酷似していることを実証でき、近世庭園の意匠研究にも貴重な資料を提供することができた。

この他、西隆寺西面回廊の調査（第344次）では、西隆寺西面回廊の瓦積基壇を検出しただけでなく、西隆寺造営以前の二時期の土地利用のあり方を解明し、左京二条二坊十四坪の調査（第345次）では、小面積ながら高密度の遺構を検出し、平城宮・法華寺周辺が宮に匹敵する重要な地域であることを改めて確認できた。

これらの調査成果の詳細については、『奈良文化財研究所紀要2003』を参照されたい。

なお、発掘調査にともなう現地説明会を実施した。実施年月日、担当者は以下の通り。

平城第337次調査（平城宮第一次大極殿院西楼）
2002年5月8日　清野　孝之
平城第347次調査（興福寺中金堂院東南部）
2002年8月31日　今井　晃樹
平城第352次調査（旧大乗院庭園）
2003年2月22日　次山　淳

文化遺産研究部の研究活動

当研究部を構成する建造物研究室、歴史研究室、遺跡研究室では、各研究室の個別テーマによる調査研究を継続的におこなうとともに、共同で南都寺院の歴史的景観に関する研究として唐招提寺を対象に取り組んでいる。

●建造物研究室の調査と研究

歴史的建造物・伝統的建造物群の調査研究

現存建築・古材、遺構・遺物などの現物資料を中心に据えて古建築及び伝統的建造物の調査研究を進めている。

法隆寺五重塔・法輪寺三重塔・東大寺転害門古材の調査をおこない、また1998年度に実施した東大寺転害門の調査を取りまとめて報告書を作成した。

島根県大社町からの受託研究として2001年度からの2カ年計画で出雲大社社殿等の調査を実施し、報告書を取りまとめた。本殿と一連の時期の建築が揃って残り境内全体として高い価値を備えていることが明らかとなった。

2001年度からの2カ年計画で岐阜県高山市の伝統的建造物群保存対策調査をおこなった。すでに保存地区となっている上三之町の北側に隣接する下町・大新町地区を対象とし歴史的な価値評価と保存対策の検討を行い、報告書を取りまとめた。

2001年度からの2カ年計画でおこなわれている栃木県近代化遺産総合調査のうち足尾銅山を担当した。

木造建造物の保存修復に関する調査研究

1998年度からの7カ年計画で進めているプロジェクトであり、多様化する文化財建造物の保存修復に対処する新たな体制

と組織を検討すること、過去の事例を検証しながら今後の保存修復のあるべき考え方、方法を探ること、参考となる海外の事例を調査研究すること、保存事業に伴い蓄積された学術資料を再評価してその保存活用方法を探ることを目的とする。2002年度は検討会の開催、海外資料の翻訳を進めるとともに、中間報告書を取りまとめた。

平城宮建物の復原的研究

大極殿院の基本設計に必要な資料として、南門・東西楼・築地回廊等の復原にかかる基本資料を整理するとともに、楼造建築等の類例調査をおこなった。

またこの他に、全国各地で実施されている文化財建造物の修理事業・遺跡整備事業に関わる修理・復原・整備等に対して援助・助言した。

●歴史研究室の調査と研究

南都の寺院が所蔵している書跡資料を継続的に調査研究している当研究室は、本年度は、興福寺・東大寺・薬師寺・唐招提寺の調査をおこなった。興福寺関係調査は『興福寺典籍文書目録第三巻』に目録を収録する予定の第61函～第80函分については、一通りすべての写真撮影を終了した。また、従来調査の手が及んでいなかった文書函についても、函番号・文書番号をつけつつ整理・写真撮影を開始している。現在第81函～第86函を整理中である。そのうち第86函は絵図函であり、その大部分は、近世興福寺の子院の絵図である。概要を『奈良文化財研究所紀要2002』に紹介し、考察を加えた。また、興福寺所蔵宋版一切経経函に関する埋文センター古環境研究室による年輪年代測定調査に協力した。

東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第4室に収蔵されている未整理聖教文書箱の調査を継続して実施中で、第2函から第5函にかけてを調査した。様々な内容を含むが、近世の東大寺年預関係資料を多く含んでいる。また写真撮影を第1函より開始している。薬師寺は、東京大学史料編纂所と共同で、第29函の調書作成・第23函の写真撮影を継続しておこなっている。また作成作業を続けてきた薬師寺典籍文書データベースについては、第1函より第10函までの目録を当研究所ホームページ上に公開した。

唐招提寺については、惣倉に保管されている未整理の近代文書の整理を開始した。文書群の全体像を把握しつつ、文書函に収納しているところである。

その他の寺院では、寺側の調査協力の要請を受けて、京都・仁和寺御経蔵第150函・151函、醍醐寺聖教、滋賀・石山寺経巻聖教奥書の調査に参加した。また奈良県教育委員会担当の県内所在黄檗版大般若経調査、滋賀県教育委員会担当の長命寺文書調査、奈良吉野町教育委員会担当の上田家文書調査が継続しておこなわれており、それら調査に指導協力している。

所内では北浦定政関係資料・棚田嘉十郎関係資料・関野貞関係資料の調査・写真撮影をおこなった。北浦定政関係資料は、『松のおち葉』第1巻を『奈良文化財研究所史料第62冊』として刊行した。また北浦定政関係資料は、2003年3月に重要文化財に答申された。

●遺跡研究室の調査と研究

遺跡研究室は2001年4月発足の文化遺産研究部に新設された研究室である。遺跡整備に関する調査研究と、庭園史に関する調査研究が当研究室の二本柱となる。

遺跡整備に関する調査研究として、整備後の遺跡の活用に対する関心が急速に高まっている現状に鑑み、中期計画では全国各地の大規模遺跡の整備・活用・管理に関する情報収集・調査・分析をとりあげた。計画は5ヶ年で、全国の対象遺跡の現地調査を順次おこない、最終的には報告書を作成することとしている。第2年度にあたる2002年度は上高津貝塚（土浦市）など関東地方の18ヶ所と森将軍塚古墳（更埴市）など中部地方等の9ヶ所、計27ヶ所の遺跡を調査した。現地調査のとりまとめは(a)整備手法・技術、(b)維持管理、(c)学習施設としての活用、(d)観光資源としての活用、(e)オープンスペースとしての活用、(f)地域の文化施設としての活用、の六つの観点から現状と課題を整理した。整備後の活用、管理が適切になされるためには整備段階から活用、管理についての綿密な計画を立てる必要があること、担当者をはじめとして自治体の熱意、力量によるところが大きいことが明らかになった。なお、研究で得られた成果については、必要に応じて各遺跡にフィードバックすることとしており、当研究室がこの分野における情報センターの役割を担うものと考えている。

庭園史に関する調査研究として、中期計画では日本の古代庭園を対象として文献史料、発掘調査資料、遺跡現地における地形・水系調査などに基づく多角的な研究を設定した。個々の庭園の形態、技術などを明らかにすることによって、庭園の源流、成立過程、変遷を解明することを期している。2002年度は飛鳥時代の庭園遺構をとりあげ、その特色と機能を中心に分析検討した。対象とした遺構は、島庄遺跡（奈良県明日香村）、郡山遺跡（宮城県仙台市）

など9ヶ所である。これらの遺構の形態的特色、技術などは明らかにすることができたが、機能、使われ方については不分明な部分が残された。2003年度に分析する奈良時代の庭園遺構との比較の中でさらに検討を加えたいと考えている。また、発掘庭園（古代～近代）に関する資料収集とデータベース化も中期計画で設定した庭園に関する研究項目であるが、これまでに296件の発掘庭園の所在地・時代・構成要素などの基本項目を和文・英文でデータベース化し、ホームページ上での公開をおこなっている。英文データベースの公開は当研究所での最初の事例である。画像データの追加が今後の課題となっている。

この他、地方公共団体が行っている遺跡の整備事業や庭園の保存修理事業に関する指導、助言も当研究室の重要な役割であり、2002年度は登呂遺跡、田和山遺跡をはじめ53か所の史跡等についておこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは7研究室からなり、それぞれの研究課題に取り組んでいるのは言うまでもなく、全国の埋蔵文化財担当者に対し、埋蔵文化財の調査や保存、遺跡保存や整備に関する研修を年間を通して開催している。また、地方公共団体や関係機関の求めに応じて、各地でおこなわれる発掘調査や保存事業について、専門的・技術的立場から指導と協力をおこなっている。

●遺物調査技術研究室の調査と研究

当研究室では、まず第一に、古代官衙遺跡の発掘調査研究や遺跡の保存活用に資するため、『古代の官衙遺跡』の編集作業を進め、全国の最新の調査研究成果を取り入れた『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』を刊行した。来年度は、続編として『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物編・各種官衙編』の編集・刊行を予定している。

第二に、古代の官衙遺跡、官衙関連遺跡、豪族居宅遺跡等の発掘調査資料を収集・整理し、適宜公開を目指してデータベース作成作業を継続している。今年度は、上記の編集作業に勢力を注いだため、収集データ量はやや少なくなったが、これまでのデータ収集の成果の一部は、上記の『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』に、建物規模のグラフや瓦葺建物所在官衙一覧表などとして掲載した。

第三に、鳥取県気高町からの受託で、上原遺跡群（因幡国気多郡衙・寺院）出土の瓦類の整理作業を進め、遺物の製作技法・形式・分類・編年に関する研究を進めた。この瓦類の分析では、上原遺跡からは関形に近い瓦類は全く出土していないが、隅切瓦を発見し、総瓦葺建物が存在していることを明らかにし、官衙施設と仏教施設とが併置されている状況を明らかにした。また、上原遺跡に隣接して存在する鹿野町寺内廃寺や気高町上原南遺跡出土の瓦類も整理を併行して進め、３つの寺院間における瓦の受給関係を検討した。また、国府町岡益廃寺の瓦類の調査もおこない、上原遺跡の軒瓦紋様を祖型として岡益廃寺の軒丸瓦が製作された可能性が高いという系譜関係を推定した。

また、20年以上前からの発掘調査図面等の資料整理も進め、これまでの調査成果を集大成した上原遺跡の変遷や遺跡の性格についての分析作業をおこない、報告書作成の作業を進めた。

第四に、官衙・集落関係遺物の分布・機能・編年などを通して、在地社会における律令支配のあり方を考える一環として、昨年度の墨書土器の機能と性格をめぐる研究集会を受け、古代の陶硯や墨を取り上げた古代官衙・集落研究会の研究集会を主催した。

第五に、各地の地方公共団体等からの依頼により、全国官衙・寺院遺跡等の発掘調査、遺物整理、遺跡の保存整備等について約20件ほどの指導助言をおこなっている。

●遺跡調査技術研究室の調査と研究

遺跡調査、なかでも発掘調査の目的は、地下に埋もれている遺跡、遺物が包含する歴史情報を取り出すことにある。この目的を達成するには、遺物分布や地形の認定、地形図作成など地表面における観察、非破壊の方法である物理探査の応用などがあり、手と目で確認しながら掘る発掘調査は、情報収集では最も精度が高く量的にも多いといえる。

この発掘調査に先立ち地下の様子を知ることができれば、それに従った調査計画や発掘手法が選択でき、発掘調査の本来の目的達成に役立つからである。探査方法のなかでは、地中レーダー探査法を用いた迅速測定と深層探査、およびそれのデータ解析を課題としている。

平成14年度にあっては、多数の各種性格の遺跡で実験測定をおこなったが、昨年度には福岡県・大刀洗町所在の下高橋官衙遺跡において、正倉院内の正倉建物や外郭の濠、同じく福岡県・久留米市の筑後国府遺跡では政庁域内の西脇殿と溝、門の遺構を地中レーダー探査によって特定するという画期的成果をあげることができたので、それがどの様な要因すなわち土壌の条件で達成されたのかを検証する調査を実施した。

良好な成果を得た土壌条件を吟味して、今後、この種の遺構を探査する際の基礎資料とするためである。このことにより、特定の遺跡へ臨んだ場合に、有効な探査ができるかどうかを判断する基準が得られる。

同じく地中レーダーの方法を用いて深層を探査する方法では、兵庫県・姫路城、平城宮大極殿などを対象に実験測定を続けた。その際には、地中レーダー探査のみならず、電気探査など他の探査方法も同一範囲へ応用して、異なる物理的要素から土壌を判別するということも基本としている。それぞれの結果に共通性が認められれば、探査成果としては信頼度の高いものとなるからである。その結果、それぞれの遺跡において、遺構の基盤となる土質の構成に関する地質情報を得ることができた。

●古環境研究室の調査と研究

古環境研究室は、古年輪を扱う年輪年代法・年輪気象法分野と動物遺存体や遺跡土壌を扱う環境考古分野とがある。

年輪年代法に関しては、以下のような調査と研究を実施した。

考古学関連

大分県から青森県にかけての12都府県下の遺跡から出土した各種木材の年代測定を行った。注目すべき成果は、島根県出雲大社遺跡出土の巨大柱根の下部底面に据えてあったスギの礎板の年輪年代が1227年と判明し、この超高層建築物は平安時代のものではなく鎌倉時代初期と確定した。京都府大藪遺跡から出土した掘建柱建物（弥生時代後期）の柱根の年輪年代は、51年＋α年と判明、この柱根には辺材部が残存していたので、ほぼ伐採年に近いことから、近畿地方における弥生時代後期の遺跡に貴重な年代情報を提供することができた。

古建築・木彫物関係

鳥取県三朝町に所在する国宝三仏寺奥院（投入堂）の建築年代について、東側縁板（辺材部がほぼ完存）の年輪年代が1098年と確定したことから、現在の建物は1100年代の初期であることが判明した。実質、日本最古の神社本殿形式の建物となった。また、投入堂の正本尊である蔵王権現像の光背にはヒノキの一枚板（柾目）が使われており、この年輪年代は1165年と判明した。この年輪年代は伐採年でもある。この仏像の胎内文書には、仁安三年（1168）の紀年銘があり、光背の年輪年代と紀年銘とがピタリと合致した事例となった。

環境考古分野では、本年度は、次に述べるような各地の遺跡出土動物遺存体に対して研究を実施し、成果は、それぞれの機関の発行する報告書に掲載した。石川県八日市地方遺跡（小松市教委）・能都町真脇遺跡（能都町教委）、奈良県橿原市坪井遺跡・御所市南郷大東遺跡（橿原考古学研究所）、大阪市長原遺跡・瓜破遺跡（大阪市文化財協会）、兵庫県芦屋市若宮遺跡（芦屋市教委）、神戸市新保遺跡（神戸市教委）、愛媛県宮前川遺跡（県埋蔵文化財センター）、高知県居徳遺跡（県埋蔵文化財センター）、長崎県原の辻遺跡（県教委）、沖縄県大里町大里城（大里町教委）などの資料である。

特筆できるのは、愛媛県宮前川遺跡群出土の動物遺存体、高知県居徳遺跡出土の動物遺存体および人骨であり、それらに残る様々な痕跡を、殺傷痕、解体痕、骨角器への加工痕、その他の傷跡として識別したことである。そして、その成果は、7月に行われた日本文化財科学会で発表した。芦屋市若宮遺跡は、動物遺存体の分析では、中世の斃牛馬処理の遺跡と見られ、将来、被差別民の歴史を語る上で重要な資料となるだろう。本年度もイノシシ、ブタの形態学的研究による分類の試みを継続し、新たにＤＮＡ、安定同位体分析を導入して先史時代のブタの研究をおこない、その成果は、2002年9月の英国ダラム大学で開催された国際動物考古学会や、2003年1月に奈良市で開催されたＣＯＥ考古科学国際会議で発表し、多くのマスコミに取り上げられた。

●保存修復科学研究室の調査と研究

保存修復科学研究室では、遺物の材質・構造調査、遺物の保存処理、遺構の保存処置に関する調査・研究をおこなった。以下に概要を述べる。

遺物の材質・構造調査としては、奈良文化財研究所が発掘調査をおこなっている発掘現場から出土した遺物の材質・構造調査をおこなった。また、開発研究として、1）非破壊非接触法によるレーザーラマン分光分析法を用いた中国古代壁画断片の顔料分析ならびに無機材料および有機材料の標準ラマンスペクトルの蓄積、2）Ｘ線ＣＲ法による考古遺物の内部構造調査およびオートラジオグラフィによる大量ガラス遺物中に含まれるカリガラスの簡易識別方法の確立、3）有機質遺物の材質分析のさらなる非破壊法と微量サンプリング法の確立とデータベースの構築を目的とした、マイクロマニピュレータシステムと赤外顕微鏡システムの新規導入をおこなった。

遺物の保存処理については、保存処理が特に困難であるクリ製大型木製品の真空凍結乾燥をおこない、良好な保存処理結果を得ることができた。前年度に問題となった木製遺物の前処理溶液への含浸については、処理溶液組成を調整することにより、遺物の変形を最小限に抑えることができることが明らかとなった。乾燥工程において、材の変形を

ひずみゲージを用いてモニタリングすることにより、大型木製遺物の真空凍結乾燥工程をコントロールできるようになった。

遺構の保存処置については、サーモグラフィを用いた遺構の温度分布とその経時変化の追跡調査、遺構表面に析出する塩類の分析、土壌および石材の安定化剤の試験などをおこなった。サーモグラフィによる調査では、明治時代に建造された歴史的建造物である宇部市のセメント窯の温度変化が直射日光による変化と水分蒸散による変化が複合的に作用していることが明らかとなるとともに、含水率の分布と塩類の析出箇所の関連性が示唆された。また、砂質土壌の安定化処置として数種の樹脂を用いた比較実験をおこない、暴露試験に供した。

この他、受託事業として重要文化財加茂岩倉遺跡出土品の事前調査、重要文化財加茂岩倉遺跡出土品の保存修理、重要文化財平原遺跡出土品の事前調査、重要文化財平原遺跡出土品の保存修理、京都市鹿苑寺出土修羅の保存処理、京都市和風迎賓施設埋文調査出土ガラスの分析、高知県田村遺跡出土ガラスの分析、隠岐島佐々木家地鎮具分析をおこなった。また、考古学における調査研究の段階で「遺物の色」に関する認識を深めようということを目的に、「古代の色」をテーマにして保存科学研究集会を開催した。

●保存修復工学研究室の調査と研究

全国の宮殿・官衙および関係遺跡のうち、すでに整備されたもの、あるいは整備中のものについて、その具体的状況を2001年度に各都道府県教育委員会を通してアンケート調査をおこなった。本年度は、全国から寄せられたアンケート調査の結果を収集し、「埋蔵文化財ニュース　111号　官衙遺跡整備状況」として刊行・公開した。これらのデータからは、遺跡整備に関して、地域の特性や史跡を取り巻く環境・地形・歴史性を重視した整備方法の重要性、遺跡保存整備に対する地域住民の理解と協力体制の確立の必要性、復元建物の是非など、遺跡の保存修復および整備の指針において、個別に対応する必要があることが如実に読み取ることができる。また、これらの得られた結果についてはデータベース化の作業を引き続き進めているところである。

●文化財情報研究室の調査と研究

文化財情報の電子化及びシステム構築については、研究会等においてそれらの研究成果を公表するとともに、所外の研究状況についての情報を収集し、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。10月には地理情報システム学会大会において、「遺跡の位置とその記述」と題して、遺跡の位置という概念の多様性・多義性についての考察と、そういった位置を記述する方式に関する問題点について研究成果を発表した。また、遺跡地図情報システム研究会、及び、遺跡情報管理検討会を開催し、最新の地形表現技術や遺跡研究に対するGISの応用等についての研究報告、意見交換をおこなった。

文化財情報の電子化として、木簡、図書、全文、写真、遺跡、航空写真、軒瓦などのデータベースにおいて、データの更新ならびに追加入力をおこないデータの充実に努めた。データベースへのデータ入力に際しては、事前にデータ整理が必要である。このため、各種文献や参考書目の調査等をおこないながらデータの拡充をおこなった。また、いくつかのデータベースにおいてはプログラムの細部の改良を設計している。

写真データベースの基礎となる写真の電子化について、35mm、ブローニ、4×5、ガラス乾板については電子化を継続しておこなった。航空写真データベースにおいては、入力の基礎となる原フィルムからのマイクロフィルムの作成、マイクロフィルムからの電子画像の作成も継続しておこなった。

●国際遺跡研究室の調査と研究

国際遺跡研究室は、研究所が主催する国際共同研究事業を円滑に実施するための調整と外国からの訪問者に対する対応が主たる業務であり、業務課と連繋しておこなっている。2002年度には、共同研究で招聘した外国人研究者は15名、施設見学や表敬訪問で研究所を訪れた外国人研究者は、24カ国72名であり、世界的な不況のためか、訪問者は昨年度より大幅に減少している。一方、科学研究費、招聘、共同研究費による研究所員の渡航件数は82件で、そのうち共同研究による渡航は40件であった。

また、埋蔵文化財センターでは、国際協力事業団・日本国際協力センターなどの要請により、他機関が招聘した外国人に対しても研修事業をおこなっているが、当研究室では研修内容や講師の選定などもコーディネートしている。2002年度には3件あり、合計26人に対し研修授業をおこなった。

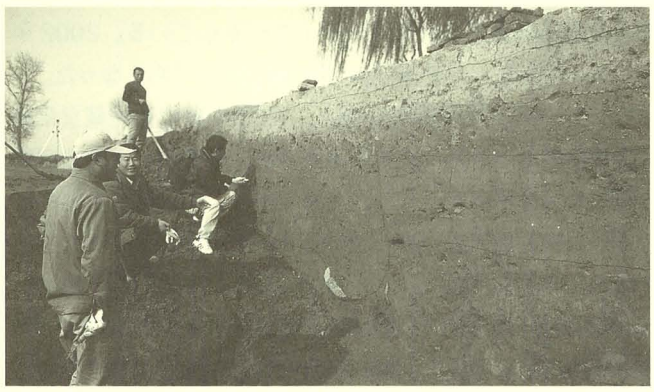
これらの国際関係業務の他に、2002年度には埋蔵文化財発掘技術者専門研修『陶磁器調査課程』を担当し、他の研修授業の講師を務めた。また、当研究室は、山内清男資料の保管並びに資料閲覧希望者への対応の任務があり、2002年度には3名が資料を閲覧した。本年度の当研究室関係の出版物は、『山内清男考古資料13』奈良文化財研究所史料第58冊、『鞏義黄冶唐三彩』奈良文化財研究所史料第61冊、『唐三彩関連文献目録』埋蔵文化財センター・ニュース109号である。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、現在、中国・韓国・カンボジア・チリの4カ国の研究機関と以下のような共同研究を実施している。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

両研究所は、2001年度より5ヵ年計画で唐長安城大明宮太液池の共同発掘調査をおこなっている。太液池は、蓬莱池とも呼ばれ、大明宮北部中央に位置する。これまでの試掘調査・発掘調査・ボーリング調査によって、平面は扁楕円形を呈し、東西最大長484 m、南北最大長310 m、面積17万㎡の壮大な規模を誇る園地であることが知られている。2002年度は、春と秋の2回、池西岸部で本格的な調査がおこなわれ、西岸の園地構造、池の様子が明らかになっている。池際及び池中で発見された遺構には、堤に沿う周遊道路、導水溝、池の護岸木杭列、景石等があり、道路西側区域では版築回廊、版築台、建物跡、井戸、石製水槽、溝等が発見されている。遺物は豊富で、瓦磚類が最も多く、石製品、陶瓷器、ガラス器、骨器、鉄器、銅器などがあり、いずれも唐代の土層から出土している。太液池の発掘調査は、唐大明宮及び中国古代庭園の研究にとって貴重な資料を提供するとともに、その成果は、日本古代都城庭園の成立を考える上でも貴重な資料となっている。発掘成果概要については、2003年中に中国側は専門雑誌『考古』に、当研究所は『紀要』に掲載する予定あり、興味をお持ちの方は是非拝読されたい。共同研究は発掘調査に参加するだけでなく、中国の研究者を招聘し、講演会や研究会をおこない、研究成果の一部を公開するとともに研究員相互の交流を図り友好関係を深めている。



唐長安城大明宮太液池共同調査（土層観察風景）

●遼寧省文物考古研究所との共同研究

2001年度に締結した「3－6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」（研究期間：2002年度～2005年度）を研究課題とした共同研究協定書は、中国国家文物局の批復が得られ、それに基づいて双方協議し、2002年度の覚書を交わした。

今年度、主たる研究対象としたのは、昨年度まで継続して調査してきた喇嘛洞墓地から出土した金属器である。9月には、日本側が訪中し、遼寧省文物考古研究所において、遺物の観察・実測・写真撮影を進めるとともに、遼西地域の三燕文化及び関連する遺跡の現地視察をおこなった。これに対し、10月には、遼寧省文物考古研究所の研究員3名を招聘し、訪日の機会をとらえて、それぞれの専門分野をテーマとした講演会を開催した。

昨年度、遼寧省文物考古研究所が編集・発行した『三燕文物精粋』の日本語版の作成に関しては、日本側における翻訳が終了するとともに、遼寧省側から図版原稿の提供を受け、刊行に向けては、日中で異なる用語についての双方の協議・検討を残すのみとなった。

また、次年度以降は、遼西地域全域における三燕文化墓葬を共同研究の対象とし、遺物の調査にあたっては、理化学的分析も含めて進めることで、双方合意に達した。

●河南省文物考古研究所との共同研究

2000年度から5ヵ年計画で実施している事業で、鞏義市大・小黄冶、白河村に所在する唐三彩窯跡及びその産品に関する共同研究である。昨年度は、これまでに大・小黄冶窯跡でおこなわれた試掘調査資料や採集資料、盗掘押収資料を共同で収集整理し、図録として刊行することになり、春には中国版図録『鞏義黄冶唐三彩』の刊行の運びとなった。本年度は、日本版図録の編集に執りかかり、2003年2月には奈良文化財研究所史料第61冊として刊行した。また、研究の基礎となる日中の唐三彩関連文献、出土遺跡目録を当研究所埋文センター・ニュース109号として刊行した。

これまで、窯跡の調査に関しては、分布調査や現地踏査が主であったが、本年度から発掘調査が始まった。秋期に2回の調査が行われ、研究員が調査に加わった。第一回目は、8月～10月におこなわれた高速道路310号線に接続する連絡自動車道拡幅に伴う緊急発掘調査である。この調査では唐三彩の窯は検出されなかったが、小黄冶西岸では灰原が、大黄冶では包含層が検出され、大量の三彩・白瓷

が出土した。第2回目は、10月～12月の間、小黄冶で実施した河南省文物考古研究所主導の学術調査である。発掘地点は、1976年に試掘調査がおこなわれた黄冶河東岸台地であり、調査面積は約1700㎡。この調査では、三彩窯6基と工房跡2箇所が検出されている。鞏義三彩窯の全容が明らかになったのは、これが最初である。窯は、平面形が馬蹄形の半地下式平窯で、燃焼室、焼成室、煙室部から成る。大、中、小の3種があるが、いずれも燃焼室部は耐火磚で、それ以外の部分は日干し煉瓦を用いて窯壁を築いている。工房の一つは、ヤオトンと半地下式建物が結合した構造で、前室、中室、後室からなる。その中には轆轤裾付け坑、竈、釉薬材料を保管する穴や罐、粘土を寝かすための小池が設置され、外側には焼成失敗品や施釉失敗品を捨てる土坑が存在する。土坑からは三彩、白瓷、黄瓷黒瓷、窯道具等大量の遺物が出土したが、とりわけ注目されるのは唐代の青花（染付）瓷器の発見である。唐代に青花瓷器が存在することは、揚州唐城出土品から知られていたが、今次の調査で、それを焼成した窯が特定されたわけである。

今次の調査よって、始めて鞏義窯場の生産実体が明らかになり、唐青花瓷器の発見など重要な成果を提供することになった。この発見は、国家文物局により、「2002年度中国十大考古発見」の候補の一つに選定された。

鞏義市大、小黄冶窯出土品を前にして

●韓国国立文化財研究所との共同研究

韓国国立文化財研究所とは、日本の都城並びに百済・新羅王京の形成と発展過程に関する共同研究と生産遺跡に関する共同研究を実施している。この他、毎年短期ではあるが、両研究所は、様々な分野の研究員を相互に派遣し、学術交流を図っている。本年度は、文化遺産研究部建造物研究室長清水真一を派遣した。滞在期間中には、韓国の建築関係研究者と意見を交換するとともに、「平城宮の復原建物」と題す講演をおこなった。

本年度も都城に関する共同研究では、日本側研究者は、新羅王京跡、昌原の発掘現場や関連遺跡を踏査し、また、新羅王京跡出土遺物の視察をおこなった。一方、韓国側研究者は、藤原宮跡の発掘調査に参加し、飛鳥地域などの関連遺跡を視察した。

生産遺跡に関する共同研究では、本年度は、扶余を中心とする百済の瓦の調査を実施した。また、3名の韓国人研究者を招聘し、報告書刊行に向けて現在整理中の飛鳥池工房跡出土遺物を視察検討し、有益な教示を頂いた。

●異なる気象条件下における不動産文化財の発掘技術及び保存に関する調査研究

当研究は、カンボジアとチリの遺跡、遺物を対象に実施している。

カンボジア・アンコール文化遺産保護に関する研究協力は1993年から開始し、これまでに3年を1フェイズとする3回9年間にわたる事業をおこなってきた。これまでに延べ32名の研究員交流をおこなうとともに、上智大学国際調査団と共同でバンテアイ＝クデイ遺跡やタニ窯跡群の調査研究をおこなってきた。2002年からはアンコール・トム内にある西トップ寺院跡を対象とした新たな共同研究事業を発足させた。今回は事業期間を2005年度までの4年間とし、事業開始当初に定めた発掘調査、遺跡探査、広域遺跡整備などの諸研究を、現地のAPSARA（アンコール地区遺跡整備開発機構）と共同でおこなう予定である。

西トップ寺院は、バイヨンの西約500mほどに位置する小型の石造寺院遺跡である。同寺院からは9世紀の碑文が発見されているものの、現存するものは建築形式などより10世紀に建立されたものと考えられ、それ以後13世紀から17世紀にかけて仏教寺院として再興されたと推定されている。この共同研究では西トップ寺院の変遷を明らかにするにとどまらず、アンコール王朝崩壊後の中世の仏教寺院としての姿を明らかにし、この地の中世史をより一

層、豊かなものにすることを目指している。また発掘現場を共同研究の場とすることによって、より実効性のある人材育成を進めることが可能になると考えている。

西トップ寺院での共同研究開始に当たり、2002年12月6日に現地においてAPSARA（アンコール地区遺跡整備開発機構）との覚書調印式をおこない、翌7日に現場で調査の鍬入れ式を執りおこなった。本年度はこれに加えて、これに先立つ8月には、西トップ寺院調査の第1回目調査として、平板による地形測量を実施した。2003年度には、遺跡に残る現存建物の詳細な図面を作成するとともに、小規模な発掘調査を実施し、地下遺構の状況を明らかし、2004・2005年度には、本格的な発掘調査と諸図面の完成を目指す予定である。

チリにおける異なる気象条件下における不動産文化財の保存に関する調査研究は、以下の通りである。

保存修復・整備の対象となっているイースター島テピトクラにある最大級のモアイ石像の劣化状況を調査し、保存修復・整備の指針を検討した。当初は同モアイ石像を起立させ、アフ（基壇）上に載せるという計画であったが、同モアイ石像がたどった履歴、技術的な問題などを検討した結果、倒れたままの状態で強化保存処置を施すという方針がたてられた。これらの強化保存処置法については、奈良文化財研究所とチリ国立文化財保存修復センターが共同研究としておこなっている暴露試験の結果を基に策定される。また、現地にて、継続しておこなっている暴露試験の状況の確認、昨年度の試験片回収と分析の確認、気象データの回収などを実施した。また、チリ共和国より2名の保存修復専門家を招聘し、分析技術のトレーニング、研究講演会をおこなった。次年度はこれまで暴露試験に供した試験片の回収・解析をおこなうとともに、さらに新たな強化材料で処理した試験片などの暴露試験を継続する予定にしている。

APSARAとの覚書調印式

●炳霊寺涅槃塑像の保存修復に関する共同研究

昨年度に引き続き、中国甘粛省・炳霊寺涅槃塑像の保存修復に関する共同研究をおこなった。この共同研究では、9分割されて40年間保管されていた涅槃塑像を修復する事業に対し、塑像の接合・強化・補填に関する技術的な援助・協力をおこなうことを、その主要な目的としているものである。昨年度は、涅槃塑像の材料学的研究と新規保存材料を用いた修復および塑像本来の塑土を用いた接合部の補填整形により、全体の接合と整形を完了した。本年度は、塑像全体の微調整をおこなうとともに、補填部分の補彩をおこない、修復作業を完了した。この事業の一部は、住友財団の「海外の文化財維持・修復事業」による助成金を受けて実施したものである。

●中国：遼寧省文物考古研究所 技術員
孫　立学／'02.10.19～10.30
●カンボディア：王立芸術大学卒業生
Chhay Visoth／'02.11.5～11.29
●カンボディア：王立芸術大学卒業生
Heng Vichea／'02.11.5～11.29
●大韓民国：釜山大学校人文大学考古学科研究助教
千　羨幸／'02.11.7～11.12
●中国：敦煌研究院 副院長
李　最雄／'02.12.19～12.20
●チリ：チリ国立文化財保護センター　保存科学研修室長
Monica Bahamondez Prieto／'03.1.11～1.24
●チリ：チリ国立文化財保護センター　保存科学研修室 研究員
Paula Valenzuela Contreras／'03.1.11～1.24
●アメリカ：フリアー／サックラーギャラリースミソニアン研究機構 上級研究員
Janet G.Douglas／'03.1.18～1.24
●中国：中国科学アカデミー　プロフェッサー
Zhang Qibing／'03.1.18～2.8
●カナダ：カナダ保存研究所 上級研究員
Clifford Cook／'03.1.19～1.25
●アメリカ：自然史博物館スミソニアン研究機構 人類学部門 部長
Melinda Z. Blackman／'03.1.19～1.26
●ポーランド：国立コペルニクス大学
Tomasz Wazny／'03.1.19～1.26
●イタリア：イギリス研究所　ローマ支部 主任研究員
Helen Patterson／'03.1.20～1.27
●大韓民国：国立文化財研究所　遺跡調査室 学芸研究士
Oh Hyun Dok／'03.1.21～1.24
●大韓民国：国立昌原文化財研究所 学芸研究士
金　智蓮／'03.2.17～2.23
●大韓民国：国立扶余文化財研究所 学芸研究士
申　鍾國／'03.2.17～2.23
●大韓民国：国立文化財研究所 学芸研究官
鄭　桂玉／'03.2.17～2.26
●大韓民国：国立慶州文化財研究所　学芸研究官
沈　榮燮／'03.2.17～3.2
●大韓民国：国立慶州文化財研究所 学芸研究士
呉　春泳／'03.2.17～3.2

奈文研研究者の海外渡航一覧

●森本　晋：ギリシア
'02.4.2～4.11／学会（CAA2002）での研究発表（ポスターセッション）とGIS関連資料の調査　科学研究費
●中島　義晴：中華人民共和国
'02.4.10～4.20／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●中村　一郎：中華人民共和国
'02.4.10～4.28／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●馬場　基：中華人民共和国
'02.4.10～4.28／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●神野　恵：中華人民共和国
'02.4.10～4.28／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●町田　章：中華人民共和国
'02.4.18～4.23／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●金子裕之：中華人民共和国
'02.4.18～4.23／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●巽　淳一郎：中華人民共和国
'02.4.22～4.27／共同研究打ち合わせ　運営費交付金
●沢田　正昭：中華人民共和国
'02.4.27～5.6／クムトラ千仏洞遺跡調査　ユネスコ北京事務所
●小林　謙一：中華人民共和国
'02.5.22～5.25／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●沢田　正昭：台湾
'02.5.25～5.29／シンポジウム「埋蔵文化財の保存科学と技術の指導及び検討会」の講師として　亞太科学技術協会
●高瀬　要一：台湾
'02.5.27～5.31／シンポジウム「埋蔵文化財の保存科学と技術の指導及び検討会」の講師として　亞太科学技術協会
●小池　伸彦：大韓民国
'02.5.27～5.29／奈良文化財研究所創立50周年記念「飛鳥・藤原京展」の展示遺物の借用に伴う、遺物の検品・梱包の立会　朝日新聞社
●小林　謙一：大韓民国
'02.6.10～6.13／韓国における古代都城等遺跡の用排水関連資料の調査　科学研究費
●沢田　正昭：中華人民共和国
'02.6.11～6.15／中国甘粛省博物館における天悠山石窟等の塑像及び壁画の材質・構造に関する共同研究　科学研究費
●肥塚　隆保：中華人民共和国
'02.6.11～6.15／天悠山石窟等の塑像及び壁画の材質・構造に関する共同研究　科学研究費
●松井　章：大韓民国
'02.6.16～6.20／韓国の遺跡出土動物依存体に関する釜山大学及び慶南考古学研究所との共同研究のため　科学研究費
●黒崎　直：中華人民共和国
'02.6.22～6.29／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●小林　謙一：中華人民共和国
'02.6.22～6.29／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●高瀬　要一：中華人民共和国
'02.6.22～7.1／東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究　科学研究費
●小野　健吉：中華人民共和国
'02.6.22～7.1／東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究　科学研究費
●杉山　洋：カンボディア
'02.7.2～7.6／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査　運営費交付金
●高妻　洋成：中華人民共和国
'02.7.9～7.14／中国四川省博物館・考古学研究所における壁画・塑像資料の材質・構造に関する共同研究　科学研究費
●沢田　正昭：中華人民共和国
'02.7.9～7.15／中国四川省博物館・考古学研究所における壁画・塑像資料の材質・構造に関する共同研究　科学研究費

●肥塚　隆保：中華人民共和国
'02.7.9～7.15／中国四川省博物館・考古学研究所における壁画・塑像資料の材質・構造に関する共同研究　科学研究費
●町田　章：中華人民共和国
'02.7.28～8.1／河南省創立50周年記念シンポジウム参加　運営費交付金　河南省文物考古研究所
●黒崎　直：中華人民共和国
'02.7.28～8.1／河南省創立50周年記念シンポジウム参加　運営費交付金　河南省文物考古研究所
●巽　淳一郎：中華人民共和国
'02.7.28～8.1／河南省創立50周年記念シンポジウム参加　運営費交付金　河南省文物考古研究所
●沢田　正昭：チリ共和国
'02.7.30～8.13／イースター島における石造文化財の保存修復に関する共同研究　運営費交付金
●肥塚　隆保：チリ共和国
'02.7.30～8.13／イースター島における石造文化財の保存修復に関する共同研究　運営費交付金
●杉山　洋：カンボディア
'02.8.7～8.14／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査　運営費交付金
●西村　康：カンボディア
'02.8.7～8.14／アンコール遺跡群中ウエスト・トップ遺跡調査　運営費交付金
●小澤　毅：中華人民共和国
'02.8.19～8.26／古代都城の用排水系統に関する資料調査　科学研究費
●光谷　拓実：カナダ
'02.8.21～8.29／国際年輪学会出席（発表）の為　科学研究費
●松井　章：連合王国
'02.8.22～9.3／国際考古動物学会において研究発表を行った後、スコットランドの文化財を踏査し、研究者と討議する。　科学研究費
●千田　剛道：大韓民国
'02.9.15～9.18／韓国古代遺跡踏査及び博物館展示の調査　運営費交付金
●高妻　洋成：チリ共和国・ブラジル
'02.9.17～10.1／モアイ石像の劣化と保存修復に関する現地調査並びにICOM-CC国際会議への出席と研究発表　科学研究費
●小林　謙一：中華人民共和国
'02.9.18～9.28／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●豊島　直博：中華人民共和国
'02.9.18～9.28／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●毛利光　俊彦：中華人民共和国
'02.9.18～9.28／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●石橋　茂登：中華人民共和国
'02.9.18～9.28／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●小池　伸彦：中華人民共和国
'02.9.18～9.28／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●巽　淳一郎：中華人民共和国
'02.9.20～9.26／河南省文物考古研究所との共同研究、黄冶唐三彩窯址発掘調査現場視察　運営費交付金
●高橋　克壽：中華人民共和国
'02.9.20～9.27／河南省文物考古研究所との共同研究、黄冶唐三彩窯址発掘調査現場視察　運営費交付金
●牛嶋　茂：中華人民共和国
'02.9.21～9.28／日中古代墳墓副葬品等の撮影　科学研究費
●沢田　正昭：中華人民共和国
'02.9.21～10.2／クムトラ千仏洞の調査　科学研究費
●肥塚　隆保：中華人民共和国
'02.9.21～10.2／クムトラ千仏洞の調査　科学研究費
●町田　章：中華人民共和国
'02.9.24～9.28／日中合同調査への参加　日本・中国先史時代遺跡共同調査実行委員会
●岡村　道雄：中華人民共和国
'02.9.24～9.28／日中合同調査への参加　日本・中国先史時代遺跡共同調査実行委員会
●杉山　洋：カンボディア
'02.10.3～10.7／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査　運営費交付金
●森本　晋：カンボディア
'02.10.3～10.7／アンコール・トム内西トップ寺院の調査　運営費交付金
●高瀬　要一：中華人民共和国
'02.10.10～10.14／第5回中・日・韓・造園学国際シンポジウムにおける研究発表　科学研究費
●松井　章：大韓民国
'02.10.13～10.15／韓国金海貝塚報告書の共同執筆、および釜山市立博物館蔵の東三洞貝塚出動物遺存体の調査のため　科学研究費
●小林　謙一：中華人民共和国
'02.11.3～11.10／東アジアにおける武器・武具の比較研究　科学研究費
●巽　淳一郎：中華人民共和国
'02.11.5～11.12／河南省文物考古研究所との共同研究（唐三彩窯址発掘調査現場及び出土遺物の視察）　運営費交付金
●川越　俊一：中華人民共和国
'02.11.5～11.12／河南省文物考古研究所との共同研究（唐三彩窯址発掘調査現場及び出土遺物の視察）　運営費交付金
●神野　恵：中華人民共和国
'02.11.5～11.12／河南省文物考古研究所との共同研究（唐三彩窯址発掘調査現場及び出土遺物の視察）　運営費交付金
●中島　義晴：中華人民共和国
'02.11.5～11.30／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●今井　晃樹：中華人民共和国
'02.11.5～11.30／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●毛利光　俊彦：大韓民国
'02.11.10～11.16／生産遺跡における国際共同研究　運営費交付金
●花谷　浩：大韓民国
'02.11.10～11.16／生産遺跡における国際共同研究　運営費交付金
●金子　裕之：中華人民共和国
'02.11.18～11.22／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●渡邊　康史：中華人民共和国
'02.11.18～11.22／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金

●清水　真一：大韓民国
'02.11.18～11.27／日韓研究員交流　古建築・建築遺跡の調査　大韓民国国立文化財研究所　運営費交付金
●中村　一郎：中華人民共和国
'02.11.18～11.30／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●内田　和伸：中華人民共和国
'02.11.18～11.30／中国社会科学院考古研究所との共同研究　運営費交付金
●森本　晋：ベルギー
'02.11.23～12.2／遺跡情報電子化に関する資料収集　科学研究費
●沢田　正昭：中華人民共和国
'02.11.26～11.30／埋蔵文化財の調査・研究・保存に関する国際会議への参加と研究発表、並びに大型木製遺物の保存処理に関する資料収集　科学研究費
●肥塚　隆保：中華人民共和国
'02.11.26～11.30／埋蔵文化財の調査・研究・保存に関する国際会議への参加と研究発表　科学研究費
●高妻　洋成：中華人民共和国
'02.11.26～12.3／埋蔵文化財の調査・研究・保存に関する国際会議への参加と研究発表、並びに大型木製遺物の保存処理に関する資料収集　科学研究費
●西村　康：大韓民国
'02.12.1～12.7／遺跡の現地探査及び講演　大韓民国国立文化財研究所
●町田　章：カンボディア
'02.12.5～12.10／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査　運営費交付金
●杉山　洋：カンボディア
'02.12.5～12.10／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査　運営費交付金
●花谷　浩：カンボディア
'02.12.5～12.13／アンコール遺跡群の調査　運営費交付金
●井上　直夫：カンボディア
'02.12.5～12.10／タニ出土土器瓦の撮影　運営費交付金
●森本　晋：カンボディア
'02.12.9～12.14／「アンコール歴史遺跡保存開発国際調整委員会技術小委員会」出席　運営費交付金
●西村　康：連合王国
'02.12.15～12.21／Recent work in Archaeological geophysics 学会における研究発表及び遺跡探査資料収集　科学研究費（天理大学）
●森本　晋：ミャンマー・シンガポール
'03.1.22～1.30／考古学情報の電子化に関する調査　運営費交付金
●井上　和人：大韓民国
'03.2.21～2.27／資料調査　科学研究費
●松井　章：大韓民国
'03.2.24～2.28／韓国慶州、テグ、テジョン等遺跡出土の動物遺存体の調査　科学研究費
●高橋　克壽：大韓民国
'03.2.25～3.3／「墳墓副葬品から見た古代日韓の地域間交流と社会変化についての研究」の為の資料収集　科学研究費
●沢田　正昭：大韓民国
'03.2.27～3.2／石造文化財の保存修復に関する共同研究の打ち合わせ　科学研究費
●森本　晋：フランス
'03.3.7～3.13／アンコール・トム内西トップ寺院関連資料の調査　運営費交付金
●清水　重敦：ベトナム
'03.3.8～3.15／ベトナムとの技術協力に向けた現地調査　文部科学省
●箱崎　和久：ベトナム
'03.3.8～3.15／ベトナムとの技術協力に向けた現地調査　文部科学省
●石橋　茂登：大韓民国
'03.3.10～3.19／日韓都城に関する国際研究　運営費交付金
●市　大樹：大韓民国
'03.3.10～3.19／日韓都城に関する国際研究　運営費交付金
●小林　謙一：中華人民共和国
'03.3.12～3.15／日中古代墳墓副葬品の比較研究　科学研究費
●小野　健吉：アメリカ
'03.3.12～3.22／庭園考古学協会設立協議等、中世日本庭園研究協議出席　ダンバートン研究所　運営費交付金
●杉山　洋：カンボディア
'03.3.14～3.19／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査　運営費交付金
●平澤　麻衣子：カンボディア
'03.3.14～3.19／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査　運営費交付金
●大塚　真琴：カンボディア
'03.3.14～3.19／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査　運営費交付金
●巽　淳一郎：中華人民共和国
'03.3.16～3.21／河南省文物考古研究所との共同研究（２００３年度の共同研究打合せ、発掘現場視察）　運営費交付金
●高瀬　要一：大韓民国
'03.3.21～3.27／東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究　科学研究費

公開講演会

第90回公開講演会 「古代飛鳥の復元」

2002年6月22日

◆石橋茂登：飛鳥の迎賓館－石神遺跡

石神遺跡は須弥山石と石人像の出土地として著名である。須弥山石は『日本書紀』の斉明3年「作須弥山像於飛鳥寺西」、同5年「甘檮丘東之川上、造須弥山、而饗陸奥與越蝦夷」、同6年「石上池辺、作須弥山、高如廟塔、以饗粛慎」にみえる須弥山だとも考えられている。饗は服属関係を確認する儀礼であり、3つの記事が指すのは同じ場所とみなされる。つまり石神遺跡のあたりに須弥山を造り、蝦夷ら化外の民の服属儀礼を行ったと考えられる。石神遺跡から出土する東北地方の土器は、その裏づけといえよう。それとともに新羅の土器も出土しているので、新羅の使者をもてなす迎賓館でもあったのだろう。しかし発掘成果によると、天武朝頃には建物が一新され、役所的な配置となる。文献からは、化外の民への賜饗の場が、天武朝期に飛鳥寺西の槻の下へ移ったと考えられている。発掘成果もそれと合致するのである。また重要な成果を付言すると、2002年度の発掘調査において天武朝期の官衙的な木簡が多量に出土し、迎賓館からの質的な変化がより鮮明になった。

◆西山和宏：飛鳥のイメージ－古代建築の復元

講演会は、奈良文化財研究所50周年記念展覧会「飛鳥・藤原京展」にともなって、大阪歴史博物館にておこなわれた。そのため、展覧会に出展中の「古代飛鳥の模型」を題材として、古代建築のしくみ、法隆寺の建築、発掘調査からわかる古代建築について講演をおこなった。

飛鳥時代の建物は法隆寺や法起寺などにしか残存しないこと、また同じ様式であることから、飛鳥時代の建築様式は法隆寺様式そのものであるとされてきた。しかし、発掘調査が進むにつれて、多種多様なものが存在することがあきらかとなってきている。これらを踏まえたうえで、飛鳥時代の様式を想定しながら、模型の設計をおこなった。

復元とは、何百、何千ある案の中の一つを採用しているに過ぎない。当時のままの姿かどうかはわからないのである。とはいえ、復元された建物や模型によって、遺跡が理解しやすくなる。そのためにも、復元は必要なのであろう。

第91回公開講演会　2002年11月16日

今回の公開講演会は、初めての試みとして、2名の研究員による講演に先立って、町田章所長が「考古学用語のあれこれ」と題して、考古学で通常もちいられる用語のいわれや伝承の仕方、ニュアンスの違いなどを、経験談や事例を交えてわかりやすく説明し、好評であった。

◆金田明大：歴史空間を地理情報で覗く

人間は、空間と時間という2つの「間」に生きている。歴史学は、過去における両者を対象に研究を積み重ねてきた。特に、日本考古学は時間についての研究が進み、それを基として多彩な歴史復元を進めるため、空間の検討が課題となっている。

昨今の情報技術の台頭によって、地理情報科学という学問が生まれつつある。その研究手段として地理情報システムや衛星画像の利用があり、これらの手段は考古学研究のいくつかの課題を解決する手段として期待される。

今回は、これら最近の研究動向を解説し、具体例として様々な情報検索に応じた分布図の作成、平城京条坊発掘データの検討、歩行モデルを用いた日本の宮都と各国の距離、古墳から見た眺望とその時間的変化、人工衛星画像による唐三彩生産遺跡の立地、といった現在検討を進めている事例の紹介をおこなった。

◆平澤麻衣子：巨大建造物は足元が肝心
－平城宮第一次大極殿の基壇－

現在、平城宮跡では平城京遷都1300年にあたる2010年に向けて、第一次大極殿の復原整備事業が進行中である。第一次大極殿は1970・1971年度に東半が発掘され、この成果を基に100分の1模型、10分の1模型が制作されている。しかしその基壇の形態は、近年の発掘調査成果に基づき大幅に変更された。

講演では、復原案の変遷を同縮尺の図で比較しながら変更内容について解説した。東半の発掘では南面階段は中央に幅広階段を1基のみ検出したが、これは後補とされ、前面の掘立柱建物との関係で北面と等しい3基と想定した。発掘成果をまとめた『平城報告XI』の復原案や100分の1・10分の1模型案では、3基の南面階段が付く一重基壇となっている。しかし、1998年度の発掘調査を踏まえて全体を再検証した結果、当初には南面に階段がないと推定し、基壇地覆石が幅約40㎝と小型にも関わらず階段の出が約4.2mと長いことから二重基壇がふさわしいと判断した。この成果を基に、現在の復原案は南面に1基の幅広階段が付く二重基壇となった。

発掘調査現地説明会

◆2002年5月18日（土）
平城第337次（平城宮第一次大極殿院西楼）発掘調査
平城宮跡発掘調査部考古第三調査室　清野　孝之
参加者：410名　調査面積：1,278㎡

◆2002年7月20日（土）
飛鳥藤原第120次（藤原宮朝堂院東南部）発掘調査
飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室　市　大樹
参加者：450名　調査面積：1,125㎡

◆2002年8月31日（土）
平城第347次（興福寺中金堂院回廊東南）発掘調査
平城宮跡発掘調査部考古第三調査室　今井　晃樹
参加者：570名　調査面積：981㎡

◆2002年11月23日（土）
飛鳥藤原第122次（石神遺跡第15次）発掘調査
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室　石橋　茂登
飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室　市　大樹
参加者：600名　調査面積：600㎡

◆2003年2月22日（土）
平城第352次（名勝旧大乗院庭園）発掘調査
平城宮跡発掘調査部主任研究官　次山　淳
参加者：450名　調査面積：267.5㎡

◆2003年3月15日（土）
飛鳥藤原第125次（藤原宮朝堂院東第二堂）発掘調査
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室　渡辺　丈彦
参加者：315名　調査面積：970㎡

平城第347次（興福寺中金堂院回廊東南）発掘調査現地説明会

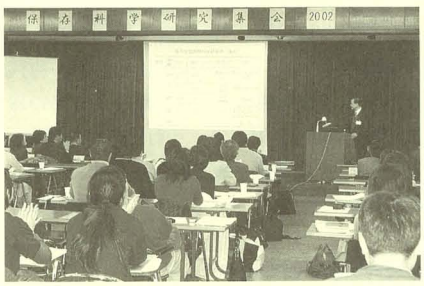
研究集会

◆保存科学研究集会

2002年12月8日

考古学における調査研究の段階で「遺物の色」に関する認識を深めようということを目的に、「古代の色」をテーマにして保存科学研究集会を開催した。各種の考古遺物などに関する着色材料やその技法、色を取り巻くさまざまな問題などについて、文献史学的な観点から材料科学的な観点にわたって最新情報を織り込みながら研究発表・討論がおこなわれた。発表タイトル（発表者）は以下のとおりである。「文献史料から見る古代の色」（渡辺晃宏）、「古墳などに使われた彩色顔料」（朽津信明）、「考古資料としての赤色顔料－弥生時代から古墳時代の色－」（本田光子）、「古代朱の産地を推定する」（今津節生）、「ベンガラ・朱を復元する」（北野信彦）、「古代ガラスの色」（肥塚隆保）、「古代金属の色」（村上隆）、「正倉院宝物に見られる貴石」（成瀬正和）、「古代の染料」（佐藤昌憲）。また、特別講演として敦煌研究院副院長の李最雄先生に「シルクロード石窟壁画の保存」というタイトルでご講演いただいた。「古代の色」という新しい観点から、これまであまり認識されていなかった問題点や知見について、活発な討論がおこなわれたことは、きわめて有意義であった。

（肥塚隆保）



保存科学研究集会2002風景

◆古代庭園研究会

2003年1月21日

2002年度からはじまった日本の古代庭園に関する調査研究の第2年度研究集会。今年度は飛鳥時代の下記の庭園遺構9か所について検討を加えた。上之宮遺跡（奈良県櫻井市）、宮滝遺跡（奈良県吉野町）、島庄遺跡（奈良県明日香村）、平田キタガワ遺跡（同）、古宮遺跡（同）、石神遺跡（同）、酒船石遺跡（同）、飛鳥京跡苑池遺構（同）、郡山遺跡（宮城県仙台市）。研究会では各遺跡の発掘調査担当

者からスライドを交えて発掘成果を発表していただき、そのあと、参加者全員で庭園関連用語の整理、史料に出てくる庭園名と遺跡との比定、方池の特色と機能、各遺跡の本来の姿・周囲の建物との関係・使われ方(機能)・特色、にテーマをしぼり討議した。今年度も各庭園の機能や使われ方、となると発掘調査そのものからの確証がなく問題を残したが、飛鳥時代の庭園の特色や構造、立地などはかなり明らかにすることができた。参加者は30名。（高瀬要一）

◆古代の銀と銀銭をめぐる史的検討

2003年3月8～9日

初期貨幣史の再構築に向けた科学研究費助成研究の一環としての研究集会。古代の銀に関して、考古学、古代史、冶金学、鉱山学、分析化学などから多角的な検討をおこない、無文銀銭から和同銀銭にいたる初期貨幣政策と、古代における地金の銀の貨幣的流通を、権衡制度や対外交易など東アジア的視点から捉えなおした。特に日中間の銀の存在形態の違いや、対馬産銀遺跡と銀の製錬技術、無文銀銭の製作技術や貨幣的使用方法などに関して新知見が得られた。研究報告は以下の通り。栄原永遠男「古代の銀と銀銭をめぐる諸問題」、松村恵司「無文銀銭の再検討」、中川正人「無文銀銭の材質調査と製作技術」、大隅亜希子「古代の権衡制度と初期貨幣政策」、田中史生「筑前国の銀の流通と対外交易―銀流通の前提の再検討―」、森明彦「無文銀銭から新和同に至る貨幣政策」、芝田悟「和同開珎銀銭の再検討」、中川あや「古代日本の銀―唐代銀製品からの照射―」、尾上博一「対馬の産銀と対馬銀山」、中田建一「石見銀山の採掘・製錬法」、小池伸彦「銀の灰吹法をめぐって」。参加者は約40名。（松村恵司）

◆飛鳥白鳳の瓦づくり
―川原寺式軒瓦の成立と展開（1）―

2003年3月8～9日

白鳳期における仏教の地方への波及をさぐる重要な手掛かりは山田寺式軒瓦と川原寺式軒瓦にある。前者については2000・2001年に検討したので、今年度は川原寺式軒瓦とこれとセットになる丸・平瓦等について、畿内を中心に取上げた。

近江では天智6年（667）の遷都から特殊な一本造り軒丸瓦が使用されるが、廃都（672年）によってあまり広まらなかったこと、標式である大和・川原寺の軒瓦（軒丸瓦はA・B・C・E4種）は近江遷都以前の天智朝（662～671）創建にふさわしいが、その一部の生産（軒丸瓦C種）は笵型の傷みや丸瓦の玉縁のつくりなどから造営後半期（685年までにはほぼ完成）になること、川原寺式軒丸瓦の笵型や製品の一部は山城・近江・伊勢などに運ばれ使用されているが、いずれも笵傷が進行しており、近江や伊勢では天武朝からになること、そしてこれらを手本にして地方では川原寺系の軒瓦が展開することなどが議論された。

川原寺式及びこの系統の軒瓦の展開について壬申の乱の論功行賞か否かにも触れたが結論に至らず、次回に改めて検討することにした。参加者は105名であった。（毛利光俊彦）

◆古代官衙・集落研究会

2003年3月13～14日

3月13・14日の両日、「古代の陶硯をめぐる諸問題―地方における文書行政をめぐって―」のテーマで研究集会を開催した。今回は、古代の陶硯や墨を取り上げ、陶硯の変遷、器種構成、分布状況、陶硯出土遺跡と遺跡の性格との関係、陶硯の形態と使用主体の階層性、墨の生産技術・流通などの問題を整理検討し、官衙における文書作成や木簡記載のあり方をめぐる研究成果と総合しながら、地方における文書行政や文字を介した末端支配の実態などについて議論した。

報告は、吉田恵二「陶硯研究の現状と課題」、西口壽生「畿内における陶硯の出現と普及」、神野恵・川越俊一「平城京出土の陶硯」、生田和宏「城柵官衙遺跡における陶硯の様相―多賀城跡出土例を中心として―」、小田和利「地方官衙と陶硯―大宰府跡出土例を中心として―」、宮瀧交二「東国集落と墨書行為」、大川原竜一・山路直充「古代の墨」、岩宮隆司「末端文書行政の実態(1)―籍帳の作成過程をめぐって―」、樋口知志「末端文書行政の実態(2)―地方における荷札木簡の記載をめぐって―」の9本で、地方公共団体・大学・博物館関係者等100人余りが出席した。

（山中敏史）

文部省科学研究費助成研究

◆東大寺所蔵聖教文書の調査研究

代表者・綾村　宏　基盤研究（A）（1）継続

東大寺図書館収蔵庫所在の未整理文書の調査研究である。今年度は、7合の文書函分につき調査データを情報処理化した。また一部写真撮影をおこなった。聖教文書の多くは近世のもので、あまり史料が紹介されていない江戸期の東大寺の実態に迫る史料として注目され、さらに紙背文書がある中世の記録も含まれていて興味深い。

◆日中古代墳墓副葬品の比較研究

代表者・花谷　浩　基盤研究（A）（2）新規

近年、資料が増加しつつある中国・遼寧省の三燕時代墓葬出土遺物を中心に、古墳出土の副葬品との比較検討をおこなった。帯金具について、日本の出土例とほぼ同時期と考えられる同型式の帯金具の存在を確認するとともに、騎兵装備については、韓半島に直接的な影響を及ぼした後、日本列島へ伝来したと考えられるにいたった。また、中国・遼寧省における三燕時代を中心とした墓葬の調査報告を収集し、データベースの作成に着手した。

◆古代中国の石窟・墓室等塑像・壁画の材質・構造解析と保存修復に関する研究

代表者・沢田正昭　基盤研究（A）（2）新規

本研究は古代塑像・壁画の美術史的な調査と材料科学的な調査を日中共同でおこない、長期間における劣化とその因子について調査し、個々の塑像・壁画に適した保存修復技術の開発など総合的な研究を目的としている。本年度は、材質分析法として携帯型蛍光X線元素分析装置の新規導入ならびにクムトラ千仏洞における現地調査、フフホト博物館所蔵壁画片の調査などをおこなった。

◆GISを用いた古代都城の用排水系統に関する総合的研究

代表者・田辺征夫　基盤研究（A）（2）継続

本年度は、基礎データ収集の成果を『平城京総合地図』として刊行した。また、この作業上、公共測量が測地成果2000へ移行することにともない、新座標への変換についての検討をおこなった。データのデジタル化と研究への利用をはかりたい。また、平城京デジタル標高モデルと条坊側溝データの整備も進んでおり、これらを基に、宮都における水利システムについての検討をおこないたい。

◆動物考古学的方法による日本、および周辺地域における古代家畜史の研究」

代表者・松井　章　基盤研究（B）（1）継続

3年目を迎え当初は五里霧中であった、日本と韓国の古代家畜史のあり方がおぼろげながら見えてきた。ブタの研究は、弥生前期の愛媛県阿方貝塚や庄内期の愛媛県宮前川遺跡群から出土した従来、イノシシと考えていた骨のDNAから、東アジアブタのDNAを検出することができた。韓国金海貝塚の分析および報告書を執筆し、東アジアブタの遺伝子や人工飼料によって育てられた証拠を安定同位体分析から明らかに出来た。

◆東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究

代表者・高瀬要一　基盤研究（B）（2）継続

4カ年計画の第3年度。中国では渤海国の宮殿であった上京龍泉府の園池遺跡等、韓国では慶州九黄洞苑池遺跡、四天王寺址等の発掘遺構・関係資料について現地調査し、情報収集と研究協議をおこなった。

また、2002年10月には北京で開催された第5回中日韓風景園林学術検討会に参加し、これまでの研究成果の一部である「古代中国 韓国 日本の方池」について研究発表し、中国、韓国の研究者と意見交換をおこなった。

◆富本銭と和同開珎の系譜をめぐる比較研究

代表者・松村恵司　基盤研究（B）（2）継続

本年度は、研究集会「古代の銀と銀銭をめぐる史的検討」を開催し、古代の銀の貨幣的使用について多角的な検討をおこなった。その結果、無文銀銭が1分に重量調整された地金貨幣で、実際の使用時には両目の不足分に銀片を添えて使用された秤量貨幣であること、その製作地が新羅である可能性が高まった。また昨年実施した研究集会の記録集『わが国鋳銭技術の史的検討』を刊行した。

◆東アジア古代都城の苑地に関する基礎的研究

代表者・金子裕之　基盤研究（B）（2）継続

古代都城の苑地（現在では園林の語を用いる）は園池だけではなく宮殿、楼閣、馬場や果樹・農園　などからなる複合施設であり、都城に必須の施設である。苑地の伝統は中国にあり、そこでは巨大な規模を誇った。こうした苑地は7世紀後半の天武朝には、朝鮮半島を経て日本に伝来した。『日本書紀』にみえる白錦御苑はその嚆矢であろう。本年は昨年度作成の日中古代苑地史料をもとに、「中国庭園史料関連データベース」を構築し、詳細な検討を加えた。その結果、古代都城の苑地には中国南朝の影が、予想以上に濃厚なことが判明した。それは苑池の名称など固有名詞に留まらず、「一茎二花蓮」といった祥瑞にも及ぶようである。祥瑞は皇帝の徳を示す事柄であり、こうした事柄まで影響が及ぶことは、8世紀初頭に直接唐からそうした知識を得たとするよりも、朝鮮半島との関わりが強い時代からの慣習を引き継いだとみるべきであろう。

8世紀。平城京内では貴族がこぞって苑池（嶋）を経営した。その元は平城宮の苑池である。発見例は必ずしも多くはないが、そこでは意匠は類似するものの、規模は宮の数分の一であり、身分秩序と同様の明確な格差が反映している。これは年度当初の予測である、「宮廷苑池が貴族や諸国苑池の原型となり、その背後には中国（唐）苑地のシステムがある」を裏づける。

◆年輪自動計測システムの開発と木質古文化財への応用

代表者・光谷拓実　基盤研究（B）（2）新規

本研究は、2002年度～2003年度にかけての2年継続である。初年度は、デジタルカメラやスキャナを用いて年輪画像を入力した後、パソコンで画像処理を行い、各年輪内の密度プロファイル情報からパターン認識をおこなうことで年輪幅を計測する方法が最適と判った。この検討によって、年輪幅の変動変化パターン取得の自動化に向けての方向性が見えてきた。

◆日本古代宮都の官衙配置の研究

代表者・渡邉晃宏　基盤研究（C）（2）継続

これまでに収集・整理・検討してきた史料をもとに、平城宮をはじめ古代の宮都の官衙配置を考えるための基礎資料を編年順に並べ、それぞれの意義を綱文として端的に示し、かつ重要事項に註釈を加えた史料集『平城宮編年史料集成（稿）』を作成した。これは、宮都の官衙配置を考察するための基礎資料であるとともに、平城宮・京の時代そのものを考えるための基礎的かつ網羅的な資料集として、今後の研究に資するものとなろう。

◆古代の非鉄金属生産の考古学的研究

代表者・小池伸彦　基盤研究（C）（2）継続

2002年度は、飛鳥池遺跡出土金属溶解坩堝ないしトリベの分析を通じて、銀熔解坩堝と「灰吹き」のような精錬機能との関わりを検討した。鉛製錬工程と遺構・遺物との関連では、平原第Ⅱ遺跡例を検討し、床尻を有する2号炉と円盤状鉛塊の組み合わせを考えた。このほか、平吉遺跡等出土長方形石組炉の型式分類、佐渡西三川砂金産地と紀伊国産銀地関連紀州鉱山等の調査を主として実施した。

◆古代の穎穀収取に関する考古学的研究

代表者・山中敏史　基盤研究（C）（2）継続

郡衙正倉遺構などの資料収集作業を継続するとともに、『平安遺文』や木簡などにみえる倉庫関係史料の収集をおこなった。

また、居宅・集落・郡衙正倉について、その平面積や桁行・梁行寸法について相互比較検討をおこない、郡衙正倉の特質についてまとめた。

◆遺構計測法の効率化ならびに体系化に関する研究

代表者・小澤　毅　基盤研究（C）（2）継続

本研究は、近年の測量機器の発達と普及に鑑み、遺構計測法の効率化と体系化を図ろうとするものである。本年度は、現在までの各種計測法の得失を比較する一方、大峰山系でおこなった測量調査の成果をまとめる作業に着手した。また、各地の実態を把握するための資料調査をひきつづいて実施した。

◆東アジアにおける武器・武具の比較研究
－騎兵装備を中心に－

代表者・小林謙一　基盤研究（C）（2）継続

日本列島において、5世紀中葉に新たに出現する、騎兵にも対応しうる北方系の武装について検討したところ、それらは、装備の一部として導入されたと理解しうる状況を示していることが明らかになった。また、近年、出土例が増加した、弥生時代、古墳時代の木甲を中心に検討した結果、板綴甲については、中国揚子江流域の漆皮甲と関連する可能性が高まるとともに、木甲の存在が、古墳から出土する鉄製短甲の出現等に関与していると考えられるにいたった。

◆墳墓副葬品から見た古代日韓の地域間交渉と社会変化についての研究

代表者・高橋克壽　基盤研究（C）（2）継続

今年度は伽耶・新羅地域に比べて出土資料の蓄積や検討が遅れている百済、そして馬韓地域の様相の解明を目指した。それにより、横穴式石室をともなう新たな百済文化が馬韓地域へ伝えられるのは、5世紀後半以後であるが、この地域を越えた九州熊本地方と百済とのつながりはそれに先立つ5世紀前半以前から認められる可能性が強まった。

◆古代日・韓出土ガラス及び鉛釉陶器の総括的研究

代表者・川越俊一　基盤研究（C）（2）新規

初年度は、従来からおこなっているガラス製品の出土資料を補うとともに、日本・韓国出土の鉛釉陶器、鉛釉器物についての資料収集とデータベース化に向けての整理をおこなった。そのなかでも、施釉硯をとりあげ、その系譜を明らかにするために、無施釉硯についても資料収集と検討を加えた。

◆データ交換のための遺跡情報構造標準化に関する基礎的研究

代表者・森本晋　基盤研究（C）（2）新規

遺跡に関する情報の記述は、研究者によっていろいろなやり方でなされている。これは学問上の問題でもあるが、データの交換や共有、公開という面からは好ましくない。このため、現行の遺跡情報の記述についての分析、情報発生時点で標準化できるかどうかの検討、さらに様々な分野での標準化動向について調査検討している。

◆戦国期、織豊期、江戸前・中期における瓦生産の地域別比較研究

代表者・山崎信二　基盤研究（C）（2）新規

東北地方では会津若松城・松島端厳寺の江戸初期の瓦についての検討。中・四国地方では、天王寺銘、播州銘の瓦の検討と岩国城・広島城・岡山城・姫路城・大坂城の瓦の同笵関係の追究をおこなった。

九州においては、肥前名護屋城造営以前における九州の近世瓦の成立の由来を熊本県例・福岡県例において検討を加えた。

◆銅鐸からみた地域間関係の研究

代表者・石橋茂登　若手研究（B）継続

銅鐸の詳細な検討により、三遠式の出現と変遷を検証した。長野県の出土状況の調査からは、銅鐸だけが運ばれたのではなく、祭祀そのものが導入されており、また多様な次元での文化伝播があったと考えられる。このほか各地において出土地点の踏査と銅鐸の観察をおこない、有益な見通しを得た。今後さらに詳細な分析をおこないたい。

◆文様、技法からみた国分寺創建期瓦の基礎的研究

代表者・清野孝之　若手研究（B）継続

本年度は、国分寺に強い影響を与えた平城宮・京出土軒瓦の製作時期を検討し、従来とは異なる見解をもつにいたった。

次に、平城・平安京内寺院といくつかの国分寺から出土する文字瓦を調査し、特徴的な押捺手法を共有する一群を確認した。

また、平城宮・京出土瓦と類似した文様をもつ国分寺の軒瓦を調査し、国分寺に波及する特定の型式・種の分布状況を検討した。これらについて、ひきつづき今後も分析を進めていきたい。

◆歴史的建造物保存・修復論についての日中比較史研究

代表者・清水重敦　若手研究（B）継続

歴史的建造物保存・修復についての日中の考え方の差異を、それぞれの形成過程から比較、再考することを今年度の課題とした。日本の建造物保存・修復については、明治期以降、現在に至るまでの理論形成過程を、ヨーロッパの理論の導入状況に注目しつつ検討した。中国については、戦後の共産主義体制のなかで新たに立ち上げられていった保存体制と、その中での修復についての考え方を、日本における理論形成過程との比較のもとに検討した。

◆古代中世文書の機能論的検討に基づく文書行政研究

代表者・吉川　聡　若手研究（B）新規

本研究は古代から中世にかけて、文書の作成・伝達・保存のあり方とその時代的変化を検討することにより、文書行政、さらには国家・社会の一面をとらえることを目指している。本年度は律令に表れた文書行政システムの検討を進め、現存する古文書の史料収集を推進した。その過程で、重要と思われる古文書を見出すこともできた。その意義などを現在追及しつつあるところである。

◆古代土器の形態模倣に関する時空間的検討

代表者・金田明大　若手研究（B）新規

日本列島の古代土器は、須恵器、金属器、磁器等の形態に影響を受け、それを模倣しながら変遷することが指摘されている。しかし、各地域におけるその模倣は決して共通しているものではない。本研究は、土器の模倣について、各地域の資料を収集し、その時期と地域性の検討を通じて模倣の実態を明らかにし、当該期の土器生産と使用のありかたを明らかにすることを目的としている。

本年度は、西日本を中心に、基礎資料の収集と実見を進めている。

◆弥生・古墳時代における鉄製武器の生産と流通に関する研究

代表者・豊島直博　若手研究（B）新規

弥生時代の鉄剣について、資料の実測と写真撮影を広くおこなった。鉄剣の把は、材質や把の部材の組み合わせ方によって5つの型式に分類できる。型式の違いは年代差や地域差を反映し、鉄剣の生産や流通の変化を考察する手がかりになることを明らかにした。

◆東北地方頁岩産地帯における石器石材の利用に関する研究

代表者・渡辺丈彦　若手研究（B）新規

本研究は、東北地方頁岩産地帯に立地する旧石器時代遺跡と、それ以外の地域の遺跡とを、選択行為を含めた石材の利用状況という観点から比較検討することを目的とする。分析対象は、同一の石器製作基盤を持つ「東山系」石器群の遺跡である。すでに、頁岩産地帯に立地する遺跡の分析は終えているので、本年度は非頁岩産地帯の青森県下北半島地域の旧石器時代遺跡の出土資料を測定・分析した。

◆中世宋様式の導入と伝播に関する研究
～北京律僧の活動を中心として～

代表者・箱崎和久　若手研究（B）新規

鎌倉時代初期に入宋僧を多く輩出した北京律僧は、同時代の重源や栄西と異なり、泉涌寺を中心とする教団を形成した。教学でも指導的立場にあり、宋様式の伝播に影響力をもったと考えられる。泉涌寺伽藍は仏殿や法堂などのいわゆる中心伽藍と、十六観堂の2つを柱とするのが特徴である。また、泉涌寺古図にみられる真言堂は、金沢文庫に残る指図とおおむね一致する。

◆生活生産遺跡出土資料研究に基づく近世科学技術の比較研究の総合化

代表者・村上　隆　特定領域研究（1）新規

近世技術の中で、特に金工技術、陶磁施釉、顔料の３分野に焦点を絞り、材質と製作技術の変遷を探っている。調査対象を主に出土資料とするところに本研究の特徴がある。金属関連では、鉱山遺跡の資料を用い、鉱石から金属を得る精錬技術の細部の情報を得た。陶磁関係では、備前焼の自然釉の微細構造を追究した。また、顔料は、吹屋ベンガラの発色のメカニズムを考察した。

◆日本における第四紀以降のイノシシの形態に基づく形態変化と系統分類

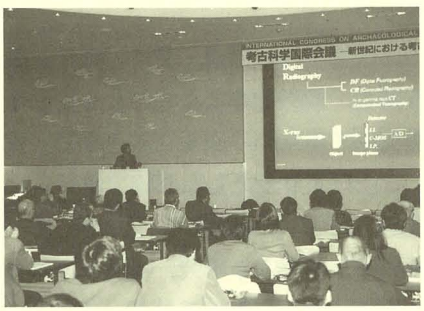
代表者・藤田正勝　特別研究員奨励費　継続

昨年度に続いて、奈良文化財研究所が所蔵する全国の報告書から、哺乳動物遺存体が出土している縄文時代の遺跡を抽出し、縄文時代のイノシシの年代別分布を文献調査した。今年度はさらに、同一遺跡でも層準や地区によってイノシシやシカの出土状況を把握できるように、イノシシやシカの年代における出土有無が確認できるデータベースを構築した。

◆考古科学の総合的研究

代表者・沢田正昭　特別推進研究（2）継続

広領域遺跡、深層探査などの新規分野の研究を展開。植物動物遺存体資料の充実を図り、データベースの構築、動物遺存体の現生骨格標本の収集。地域を限定した古年輪データの収集と古気象復元のための研究。無機質・有機質遺物の材質・構造の研究、遺構・遺物の保存修復に関する研究。国際会議の開催。



COE国際会議風景

学会・研究会等の活動

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2002年７月５～６日に第14回総会および研究会をおこなった。

７月５日：総会　参加者138名（含委任状）・講演　参加者112名「記録写真のスタンス」（田辺昭三氏：神戸山手大学）

７月６日：講演　参加者108名「デジタルカメラ時代の入り口で～デジカメをどう使うか～」（玉内公一氏：ティーコア）公開討論　参加者116名「今なぜ銀塩か？～デジタルと銀塩のはざまで～」

１日目は田辺昭三先生をお迎えして、記録写真の原点に立ち返るご講演をいただいた。

２日目の公開討論会は大変盛況で、昨今のデジタル写真に傾倒する流れを記録写真の面から検証して、果たして記録写真においてデジタル化は本当に有効であるかどうかを討論した。研究会としてこれを元に記録写真の指針を示すことができた有意義な討論であった。　（中村一郎）

◆木簡学会研究集会

2002年12月７・８の両日、第24回木簡学会研究集会を奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において開催した。７日は、田良島哲氏（文化庁美術学芸課）の研究報告「中世の木札文書」があり、８日は渡辺晃宏（奈文研）「2002年全国出土の木簡」で古代から中・近世にわたる多様な木簡を概観した後、天武朝から八世紀までの長期間にわたる時期の木簡が出土し、白錦後苑の比定地ともされ近年注目を集めている飛鳥京跡苑池遺構について、卜部行弘氏（奈良県立橿原考古学研究所）「飛鳥京跡苑池遺構の調査の概要」、鶴見泰寿氏（同）「飛鳥京跡苑池遺構出土木簡」の２本の報告があり、活発な議論をおこなった。また、『木簡研究』第24号を刊行した（編集担当　馬場　基）。（渡辺晃宏）

◆「日本遺跡学会」設立される

2003年2月1日、奈良文化財研究所講堂にて設立総会が開催され、「日本遺跡学会」が設立された。

埋蔵文化財センターが2000年度から2002年度まで3か年かけて学会設立に向けた“研究集会”を積み重ね、なんとか学会の形に漕ぎつけた。設立総会には130名あまりの人が集まり、2003年3月末現在230名ほどの方が会員になっていただいている。裏方を引き受ける事務局としては大変なのだが、さまざまな分野からより多くの人に参加していただき、有意義で、かつ楽しい学会を作り上げていきたいと考えている。

「日本遺跡学会」とはなんぞや、何をする学会であるのか、については“設立趣意書”と“当面の活動テーマ”を御覧頂きたいのであるが、要するに現代のわれわれが遺跡とよりよく共存、共生してゆくにはどうしたらいいのかを考える学会だと思う。事務局は当面の間、文化遺産研究部遺跡研究室に置くので、入会希望などは同研究室までご連絡下さい。（高瀬要一）

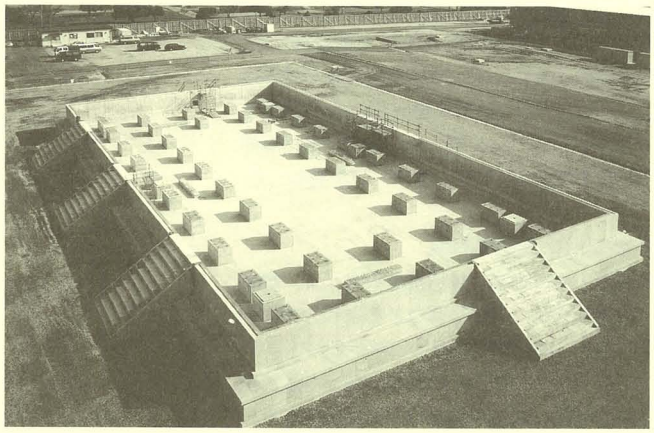
日本遺跡学会設立総会風景

文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等

●平城宮跡の整備

特別史跡平城宮跡第一次大極殿復原事業

第一次大極殿復原事業について、文化庁および文部科学省大臣官房文教施設部大阪工事事務所に対し、施工・監理業務に関する指導・助言をおこなった。2002年度までに発注された工事は、木材の購入・加工（初重の柱・頭貫・斗・一～三ノ肘木・天井板など）、大極殿基壇躯体及び石積化粧や素屋根建設工事、免震装置、仮設工事（工事用地造成、木材保管棟・加工棟・原寸場・一般公開施設等建設）などであった。



第1次大極殿復原工事　2003年1月の状況

特別史跡平城宮跡第一次大極殿地区復原整備に関する調査検討業務

第一次大極殿地区の古代建築物の構造・意匠、彩色、飾り金具、瓦等に関する調査・検討をおこなうとともに、平城宮跡において建物を復原するために必要な調査検討・資料収集を目的として、文化庁より受託した業務である。

検討内容は、①基壇および礎石の復原研究、②木部・壁・版築の復原研究、③屋根廻りに関する研究、④飾り金具等の復原研究、⑤彩色・壁画・扁額に関する研究、⑥地形・地表の仕上げに関する研究と軟弱地盤範囲の調査方法に関する研究、⑦文献からみた大極殿の使用方法の研究、⑧大極殿および院地区活用のための研究、⑨活用に伴う復原整備に関する研究であり、項目ごとの研究会をも開催しながら検討を進め、その成果について文化庁に報告をおこなった。

特別史跡平城宮跡第一次大極殿地区復原整備に関する軟弱地盤等調査検討業務

(1) 大極殿院地区軟弱地盤調査　大極殿院地区で存在が明らかになった軟弱地盤について、その範囲や深さの状況等の資料を得るために表面波探査、電気探査、地中レーダー探査、重力探査をおこなった。

(2) 平城宮跡出土瓦の理化学的分析　大極殿及び院地区の復原に際し使用する瓦について、復原に必要な数値的条件を把握するための分析をおこなった。

第一次大極殿院地区復原基本設計準備事業

第一次大極殿院地区復原基本設計準備では、文部科学省発注業務の請負者である（財）文化財建造物保存技術協会に対し、復原検討会議を毎月２～３回開催し、大極殿院回廊・南門・東西楼閣建物及び基壇復原図の作成、斜路と磚積擁壁・地形復原図や地形造成図等の作成、地形模型製作やＣＧ製作についての指導助言をおこなった。

平城宮跡地一般整備

平城宮跡地の整備では、宮西面中央門（佐伯門）跡から東に整備されていた宮内道路の舗装、遺構展示館周辺見学広場のパーゴラの改修・駐車場（造酒司跡）の植栽などがおこなわれた。これに対し、設計や施工に際しての史跡整備のこれまでの考え方や遺構面確認立会などの指導助言をおこなった。

●藤原宮跡の整備

特別史跡藤原宮跡整備基本計画

文化庁の策定する特別史跡藤原宮跡整備基本計画について、検討会議が９回開催され、飛鳥藤原宮跡発掘調査部員が主に参加し資料提供および指導助言をおこなった。

藤原宮跡地一般整備

奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部との協議をおこないながら、文教施設部では藤原宮跡地の整備で、宮跡地への進入口に設置されていた車止め柵 11 カ所 18 基を更新した。

●キトラ古墳の予備調査

キトラ古墳の横口式石槨には、四神、天文図、獣面人身像（十二支像）などの極彩色壁画が描かれている。だが、この壁画の状態はそれほど良好ではない。文化庁では、石槨の内部調査と保存を万全の体制でおこなうため、仮設保護覆屋の建設を 2002 年度に予算化した。今回の予備調査は、それに先立ち、石槨前面（南）の墓道部を発掘調査して、覆屋設計の資料とすることを目的とした。

調査は、墓道部とその周辺を２回にわけて実施し、墓道の規模や盗掘坑の形状などを明らかにすることができた。墓道は、幅 2.35 ～ 2.65 mあり、推定全長約５mであった。墓道床面は石槨に接続する長さ 1.6 mがほぼ水平で、それから先は南に向かって傾斜する。床面には、コロのレール痕跡（道板痕跡）が３条ないし４条あった。棺搬入と石槨閉塞後に、墓道は版築によって埋め戻されるが、その埋土は墳丘土と区別できるものであった。また、以前に確認されていた排水溝を再確認するとともに、石槨の三次元的位置も確定した。今後予定される石槨内部調査に向かって、その方法と手順を立案するに不可欠な情報である。

さらに建設工事開始後は建物敷部分の調査と立会調査をおこなった。その結果、墳丘築成状況を明らかにすることができた。

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財センターの研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当専門職員の資質向上を目的とする研修を実施している。今年度には、一般研修1課程、専門研修9課程、特別研修4課程、合計14課程の研修を開催した。研修総日数167日、研修生総数249名であった。研修生の数は、昨年度より若干少ないが、これは、昨年度の集計に、「遺跡学をめざした遺跡の保存と活用」と題する特別講座の参加員数を加えているからである。

また、埋蔵文化財センターおよび各研究部では、要請があれば、地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査・遺物の保存・遺跡の保存・遺跡整備に対して指導・助言等の協力をおこなっている。今年度は、青森県御所川原須恵器窯・岡山県伊部大窯等の地下探査、茨城県常陸国衙跡・埼玉県幡羅遺跡・神奈川県西方A遺跡・滋賀県山ノ神遺跡・鳥取県名和衣装谷遺跡等の発掘調査に対する指導助言、石川県津幡町加茂遺跡出土「加賀郡榜示札（ぼうじさつ）」・鳥取県青谷上寺地遺跡出土編物・熊本城礎石・長崎県鷹島海底遺跡出土遺物等に対する保存に関する指導助言、秋田県特別史跡大湯環状列石・山口県大内氏遺跡館跡等各地の整備事業に対する指導助言、藤枝市史編纂等の協力をおこなった。また、本年度には、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受け、動物遺体の同定、年輪年代測定、遺物の保存処理・分析等の受託研究を合わせて14件おこなった。

京都大学大学院の教育

京都大学大学院の人間・環境学研究科、文化地域・地域環境学専攻、環境発展論講座において、住環境保全論（山中敏史、長尾　充）、考古環境学論（田辺征夫）、文化財保存科学論（沢田正昭）、文化財保存調査法論（光谷拓実、松井　章）に関する講義、およびそれらに関する演習および実習をおこなった。なお、講義は京都大学と奈良文化財研究所において実施、演習及び実習は主として奈良文化財研究所の各担当教官の研究室において開催した。

奈良女子大学大学院の教育

奈良文化財研究所が奈良女子大学と連携している大学院教育では、3名の併任教官が人間文化研究科（博士後期課程）比較文化学専攻文化史論講座の3科目を受け持っている。

歴史考古学特論（花谷　浩）、宗教考古学特論（金子裕之）、歴史資料論（渡邉晃宏）であり、歴史考古学は6・7世紀の寺院や瓦磚の諸問題、宗教考古学では律令的祭祀の諸問題、歴史資料論は木簡の諸問題を扱った。

これらはいずれも飛鳥藤原京、平城京における貴重な発掘品を前に行う授業であり、他に例をみない。奈文研ならではの“贅沢”な教育、といえよう。

2002年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧　（委員として指導・協力しているものを掲載）

（北海道）	カリンバ3遺跡
	標津遺跡群天然記念物標津湿原
（青森）	三内丸山遺跡　五所川原須恵器窯跡群
	青森県史編さん
（岩手）	柳之御所遺跡　志波城跡
（宮城）	多賀城跡
（栃木）	下野国分寺跡 栃木県近代遺産（建造物）総合調査
（新潟）	佐渡金銀山遺跡
（富山）	布尾山古墳
（石川）	加茂遺跡出土加賀郡榜示札
（福井）	国吉城跡　王山古墳群・兜山古墳　後瀬山城跡
（岐阜）	長塚古墳　藤枝市史編さん
（静岡）	新居関跡　登呂遺跡　県内寺院官衙遺跡
（愛知）	小長曽陶器窯跡
（三重）	宝塚古墳
（滋賀）	近江国庁跡　安土城跡
（京都）	恭仁宮跡　仁和寺　井手内遺跡
（大阪）	堺市史跡土塔　今城塚古墳　新堂廃寺
	闘鶏山古墳　千早城跡・楠木城跡・赤阪城跡
（兵庫）	（仮称）三輪明神窯跡公園
（奈良）	酒船石遺跡　春日大社　大乗院庭園
	キトラ古墳周辺地区　藤ノ木古墳
	橿原市伝統的建造物群保存地区
（鳥取）	上原遺跡　青谷上寺地遺跡　妻木晩田遺跡
（島根）	石見銀山遺跡　出雲国府跡　西谷墳墓群
	田和山遺跡
（広島）	安芸国分寺跡　府中市埋蔵文化財
（岡山）	鬼城山　万富東大寺瓦窯跡　津山市景観整備
	備中松山城跡
（山口）	大内氏遺跡　山口県史編さん
（徳島）	阿波国分尼寺跡　脇町景観整備
（香川）	有岡古墳群　宗吉瓦窯跡　丸亀城跡
	快天山古墳
（愛媛）	来住廃寺跡　宇和島城跡　葉佐池古墳
	道後温泉本館
（福岡）	大宰府史跡　三雲遺跡　下高橋官衙遺跡
	旧三奈木黒田家庭園
（佐賀）	肥前国府跡　名護屋城跡並びに陣屋
	吉野ヶ里歴史公園南西郭西方　天狗谷窯跡
（長崎）	原の辻遺跡　肥前波佐見陶磁器窯跡
（宮崎）	生目古墳群史跡公園

2002年度 埋蔵文化財発掘技術者等研修課程一覧

区分	課程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	申込者数	受講者数
一般研修	一般課程	2002年6月18日～7月26日	20名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、発掘調査の経験が十分でない者	遺跡の発掘調査を進めるために必要な基礎的知識と技術の研修	遺跡調査技術研究室	39日	18名	18名
専門研修	遺物撮影課程	2002年4月17日～4月24日	16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、一般研修修了者又はそれと同程度の経験を有する者	埋蔵文化財報告書作成に必要な遺物撮影の基礎知識と、実習を通して撮影技術の研修	写真資料調査室	8日	25名	20名
	保存科学課程	2002年5月21日～6月5日	16名	〃	遺物の保存に関する保存科学的な専門的知識と技術の研修	保存修復科学研究室	16日	10名	10名
	文化財写真課程	2002年8月20日～9月20日	16名	〃	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	写真資料調査室	32日	7名	7名
	中近世城郭調査課程	2002年9月26日～10月3日	16名	〃	中近世の城郭跡の調査・修復に必要な専門的知識と技術の研修	保存修復工学研究室	8日	29名	21名
	交通遺跡調査課程	2002年10月23日～10月30日	16名	〃	道路遺構や古代の交通関係施設の遺跡の調査研究に関する専門的な知識と技術の研修	遺物調査技術研究室	8日	16名	16名
	木製品調査課程	2002年12月3日～12月11日	16名	〃	木製品の調査や応急保存処理などに関する専門的な知識と技術の研修	遺物調査技術研究室	9日	20名	20名
	報告書作成課程	2003年1月15日～1月24日	24名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	文化財情報研究室	10日	38名	30名
	遺跡環境調査課程	2003年1月30日～2月14日	16名	〃	遺跡の発掘において、第四紀学の成果を用いて過去の自然環境を推定復原する方法を学ぶ研修	古環境研究室	16日	13名	13名
	陶磁器調査課程	2003年2月20日～2月26日	16名	〃	古代・中近世遺跡出土中国・日本陶磁器の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	国際遺跡研究室	7日	45名	30名
特別研修	測量外注管理課程	2002年10月9日～10月11日	16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、一般研修修了者又はそれと同程度の経験を有する者	測量外注管理に必要な基礎知識と仕様書作成の実際についての研修	遺跡調査技術研究室	3日	20名	20名
	自然科学的年代決定法課程	2002年11月12日～11月15日	30名	〃	自然科学的手法による年代測定に関する基礎的知識の研修	古環境研究室	4日	13名	13名
	遺跡探査外注管理課程	2002年11月26日～11月28日	12名	〃	遺跡探査外注管理に必要な基礎知識と仕様書作成の実際についての研修	遺跡調査技術研究室	3日	3名	3名
	遺跡地図情報課程	2002年12月17日～12月20日	24名	〃	埋蔵文化財の調査研究へのGISの応用に関する基礎的知識の研修	文化財情報研究室	4日	29名	28名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展示「あすか以前」

2002年4月23日～6月2日

飛鳥地域は古墳時代の終末期から、ようやく成立しようとする日本という国の最初の首都として、日本史上に特別な意味をもつことになる。日本書紀の記事に書きとどめられた古代の都としての「飛鳥」と、都にかかわるさまざまな遺跡は、広く世に知られ注目を集めているが、それ以前のこの土地の歴史については、あまり話題に取り上げられることもないというのが現状である。

今回の展示は、日本史の表舞台に登場する以前の、この地域の歴史的な変遷をたどり、縄文・弥生・古墳各時代の飛鳥地域の遺跡・遺物の概要を一般に紹介しようと企画した。展示でとりあげるのは、旧石器時代の終末を告げる檜前脇田遺跡、縄文、中期・後期の集落跡である大官大寺下層遺構、藤原宮の下に広がる弥生時代の村、そして飛鳥時代直前にいとなまれた小立古墳、八釣・東山古墳群などである。この展示が、地理的にも、経済的にも、有利な立場にあったとは言いがたい土地、この飛鳥がどのように、この国の政治・文化の中枢になっていったのかを、あらためて見直す契機としたい。

◆秋期特別展示「AOの記憶」

2002年10月8日～12月1日

文化財建造物は、建立からの長い年月、所有者の尽力によって幾度となく修理工事がおこなわれ、保護されてきた。1897年に古社寺保存法が成立してから、1929年に国宝保存法、1950年に文化財保護法とその名称は変われども、国の事業として文化財建造物の修理工事がおこなわれるようになる。修理工事の際には綿密な調査がおこなわれ、修理工事報告書とAOのケント紙に烏口や面相筆を用いて墨入れした保存図と呼ばれる図面が作成される。修理技術者によって永年保存を目的に作成された保存図は、本来の記録性だけにとどまらず、図面作品として美術的な側面すら伴う、価値あるものである。また、修理の際には、腐朽などによりやむを得ず部材が取り替えられることがあるが、これらの古材のなかには、時代の特性も示すものもあれば、銘文を残すものも存在する。そのため、建物と同様の価値を有することから小屋裏などに保管されることになっている。今回の特展では、ほとんど人目のふれることのない保存図をもとに、明治時代から現在に至るまでの修理工事の歴史をテーマとして、展示するものである。

◆企画展示「鏡の歴史－含水居蔵鏡の世界－」

2002年7月30日～9月1日

当館では東アジア金工史の研究として、昨年度、神門神社所蔵鏡と含水居蔵鏡の調査をおこない研究図録を出版した。この調査成果を広く公開するため、企画展示として含水居蔵鏡の展示を計画した。本展示は含水居蔵鏡全134面の中から代表的な鏡56面を選び、実物の展示を通して鏡の歴史を理解できるように努めた。

本鏡群は奈良市在住の個人コレクターによる蒐集品で、雅号である含水居にちなみ含水居蔵鏡と呼ぶ。本鏡群は海獣葡萄鏡を中心とした唐式鏡コレクションとして著名であり、これまでに橿原考古学研究所附属博物館『唐草文の世界』展（1987）や五条文化博物館『西域への憧憬　海獣葡萄鏡文様に見る唐文化の世界性』展（1996）に出陳されるとともに、海獣葡萄鏡研究の基礎資料として多くの研究で取り上げられてきた。また同型鏡を多く含む鏡群としても注目され、海獣葡萄鏡の踏返鋳造の問題など、同型鏡研究に欠くことのできない鏡群である。

平城宮跡資料館の展示

「発掘速報展平城2002―奈良の都を掘る―」を2002年11月1日から11月21日まで開催した。この展示は、平城宮跡発掘調査部が、主として2001年度に実施した平城宮および平城京内の発掘調査成果を速報展示したものである。平城宮では、第一次大極殿院西楼（平城第337次）で、かつて調査された東楼と対称の位置に同規模の遺構を確認した。出土遺物では、「ベンガラ」のついた「埋め木」や、「小便禁止」の木簡などに熱い目がそそがれた。第二次朝集殿院南門（第326次）では、予想位置に門の存在を確認し、規模、造営工事の過程が判明したことを紹介した。

平城京では、宅地と寺院の調査が主となった。長屋王邸の中枢部の調査（第329次）では、懸案であった建物規模の確定にいたった。寺院では、興福寺関係の調査が多数を占めた。興福寺中金堂（第325次）では、創建以来の度重なる火災と復興の様子、豪華な鎮壇具を紹介した。一乗院（第330次）、大乗院（第336次）ではともに、園池の変遷をたどった。明治以降、一乗院は裁判所に、大乗院は一時小学校の敷地になっている。今回は、こうした近代史に関わる遺物をも展示した。ノート代わりに使われた石盤のまえでは、昔話に花を咲かせる姿がみられた。

解説ボランティア事業

平城宮跡を訪れた観光客等に平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を、1999年10月から開始した。

2003年4月1日現在142名（1期生61名、2期生28名、3期生53名）の解説ボランティアが登録されており、1日当り7～10名が休館日の月曜を除く毎日、平城宮跡資料館、遺構展示館、東院庭園、朱雀門を拠点に活動している。

2002年度の活動実績は、延べ5万3千有余名にのぼる多くの来訪者を解説案内し、1人当り月2～3日の活動状況である。また、来訪者からは、お礼の手紙が寄せられたり、文化庁の「文化ボランティア通信」をはじめマスコミや奈良県のHPや観光情報誌等にも採り上げられ、ボランティアの熱心な学習意欲と熱意により、高度な文化解説と好評を得ている。

研究所としては、ボランティア活動を支援するため、研修、学習会及び、遺跡見学会を実施、解説資料や刊行物の配布を行っている。更に、2001年から「続日本紀」の読書会、ガイド英語研究会を長期計画で始めたところである。また、案内板の設置や活動着の配布、所員を交えた交流会を実施するなどボランティア活動を積極的に支援している。

図書資料・データベースの公開

本研究所図書資料室では、遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書約22万冊、逐次刊行物約7,000タイトル、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真約76万点を所蔵している。2002年度は、新たに図書約1万3千冊、写真約2万点の受入をおこなった。所外の研究者および一般の利用者へは、一般公開施設として図書資料室を公開し、所蔵資料について閲覧等の利用が可能となっているが、2002年度には、所蔵図書データベースの検索をインターネット経由で可能とし、所外利用者の図書資料室利用に対して一層の推進を図っている。

本研究所では、文化財情報の電子化をおこなうとともに公開用の文化財関係データベースの内容の充実を継続的に実施している。2002年度には、インターネット経由で公開している木簡データベース等について内容の充実をおこなうとともに前述の図書データベースの他、発掘庭園データベース（和文・英文）、薬師寺典籍文書データベース、報告書抄録データベースの公開をおこなった。

2002年度　平城宮跡解説ボランティア活動状況

年　月	ボランティア活動者数	解説のべ人数			計
		団体		個人	
		学生	一般		
2002年 4月	170	1,596	1,009	2,620	5,225
5月	152	5,495	747	2,200	8,442
6月	159	1,639	669	2,388	4,696
7月	164	215	330	1,445	1,990
8月	148	0	240	2,418	2,658
9月	171	475	192	2,305	2,972
10月	259	2,164	774	3,443	6,381
11月	264	736	1,412	4,221	6,369
12月	235	259	604	2,483	3,346
2003年 1月	241	332	153	1,974	2,459
2月	239	442	406	2,613	3,461
3月	245	805	811	4,049	5,665
計	2,447	14,158	7,347	32,159	53,664

4 創立50周年記念事業

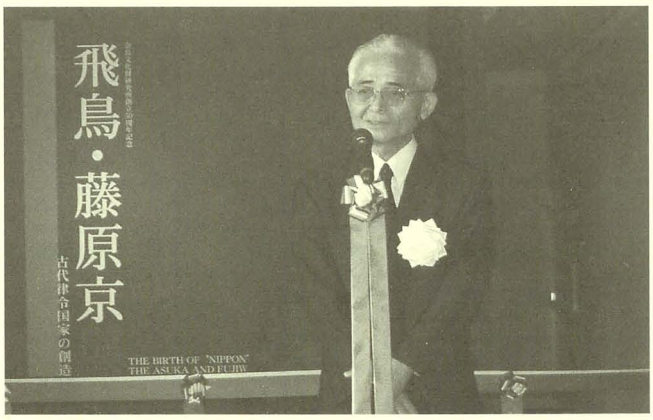
飛鳥・藤原京展

奈良文化財研究所創立50周年を記念する展覧会『飛鳥・藤原京展』を、2002年6月1日から2003年3月9日まで、大阪・東京・宮城・三重の4会場で開催した。飛鳥をテーマとした展覧会は、1972年の『飛鳥展』以来、実に30年ぶりのことであり、この間に蓄積された飛鳥藤原地域の遺跡情報を、歴史的に再構成する待望の展覧会となった。主催は奈良文化財研究所と朝日新聞社、大阪歴史博物館、東京都美術館、東北歴史博物館、四日市市立博物館で、文化庁、奈良県、橿原市、桜井市、高取町、明日香村の後援を得た。展覧会のサブタイトルは「古代律令国家の創造」。中国に出現した強大な隋・唐帝国の余波を受け、隣国の百済、高句麗が相次いで滅亡する緊迫した東アジア情勢の中で、大化の改新、白村江の敗戦、壬申の乱という歴史の荒波を乗りこえて、「日本」という法治国家が誕生する激動の時代を、発掘された考古遺物を中心に、国宝や重要文化財に指定された絵画、仏像、典籍など148件、総数約4300点にのぼる文物で展観した。

展示構成は、プロローグ「飛鳥・藤原京へのいざない」、第Ⅰ章「飛鳥時代の幕あけ」、第Ⅱ章「律令国家の胎動」、第Ⅲ章「天武・持統朝の世界」、第Ⅳ章「中国式都城藤原京の世界」、エピローグ「律令国家の完成と遣唐使の再開」からなり、展示には近年注目を集めた飛鳥池遺跡、酒船石遺跡、飛鳥京苑池遺跡、キトラ古墳など、最新の調査成果も盛り込んだ。また本展のために新たに制作した飛鳥大仏頭部模型、水落遺跡漏刻復原模型、古代飛鳥の模型、山田寺金堂軒先復原模型、同灯籠復原、壬申乱の武人復原、富本銭枝銭復原、大宝律令の完成を慶祝する幢幡模型なども多くの見学者から好評を得た。

展覧会図録はA4判変形228頁（カラー頁172頁）で、解説の文字数を最小限に押さえ、写真や早川和子氏のイラストを多用するなど、わかりやすい内容の図録となるように工夫を凝らし、巻末に英・中・韓3ヵ国語の展覧会要旨と出品目録を掲載した。各会場の入場者数は、大阪歴史博物館40,442人、東京都美術館99,200人、東北歴史博物館13,100人、四日市市立博物館11,568人で、総数164,310人にのぼり、図録頒布数は18,440冊を数えた。本展を通して、飛鳥藤原地域の文化遺産や歴史的景観の重要性が再認識されるとともに、半世紀にわたる奈良文化財研究所の調査研究活動や社会的役割を周知することができた。

（付記：本展を中心となって運営された朝日新聞社事業本部大阪企画事業部の河端進氏が、展覧会作業の終了直前に病により御逝去されました。本展に対する氏の献身的な御尽力に心から感謝申し上げるとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。）



飛鳥・藤原京展開会式風景

国際シンポジウム「東アジアの古代都城」

東京都美術館で開催中の『飛鳥・藤原京展』に合わせて、2002年8月17日、土曜日に「東アジアの古代都城」をテーマにした国際講演会を、東京上野の都美講堂でおこない、盛会裡に終わった。演者は中国社会科学院考古研究所の劉慶柱所長、安家瑤氏、何歳利氏、韓国からは国立文化財研究所を退官したばかりの趙由典（前）所長、慶州国立文化財研究所（当時）の李恩碩氏、それに奈良文化財研究所の町田、金子、井上（和）の8名。基調報告、研究報告と、朝から夕方まで目白押しに続いた講演にもかかわらず、最後まで満席の状態であった。聴衆は事前に応募して当選した方に限られていたが、それでも開演時間よりかなり前から入り口には長蛇の列がみられ、一般の関心の高さがうかがわれる光景であった。

講演の内容は『（奈良文化財研究所）研究論集XIV東アジアの古代都城』として2003年3月に刊行され、また吉川弘文館から市販されることになった。

国際シンポジウム開催風景

公開シンポジウム「古代建築研究の新たな展開」

奈良文化財研究所創立以来の中心的な研究テーマのひとつである古代建築研究について、研究の歩みを振り返りながら今後の研究の進むべき道を考える目的で、2002年11月9日に公開シンポジウムを開催した。

近年では阪神淡路大震災を契機とする古建築の構造力学的解析の試み、年輪年代学による木材伐採年の特定などの科学的手法の導入、史跡における復原事業にともなう仕様・施工面に踏み込んだ検討などにより、古代建築研究に新たな展開が見られつつあり、次の7件の報告がおこなわれた。①「古代建築研究の新たな展開」清水真一（奈文研）、②「古代建築の力学的性状と構造診断」今西良男（奈良県教育委員会）、③「出土瓦による屋根景観の復原」上原真人（京都大学）、④「年輪年代学からみた新たな課題」光谷拓実（奈文研）、⑤「復原設計から読む古代建築」清水重敦（奈文研）、⑥「発掘現場からの問いかけ」長尾　充（奈文研）、⑦「近年の古代建築修理から」松田敏行（元奈良県教育委員会）

全国から多数の参加者を得て活発に質問・感想が寄せられたことは古代建築研究への関心の深さと期待を示すものであり、今後へのスタートラインとなった。

50周年公開シンポジウム会場風景

5 その他

刊行物・データベース等

奈良文化財研究所学報

第 1 冊 仏師運慶の研究 (1954)
第 2 冊 修学院離宮の復原的研究 (1954)
第 3 冊 文化史論叢 (1955)
第 4 冊 奈良時代僧房の研究 (1956)
第 5 冊 飛鳥寺発掘調査報告 (1957)
第 6 冊 中世庭園文化史 (1958)
第 7 冊 興福寺食堂発掘調査報告 (1958)
第 8 冊 文化財論叢Ⅰ (1959)
第 9 冊 川原寺発掘調査報告 (1959)
第 10 冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 (1960)
第 11 冊 院の御所と御堂－院家建築の研究－ (1961)
第 12 冊 巧匠阿弥陀仏快慶 (1962)
第 13 冊 寝殿造系庭園の立地的考察 (1962)
第 14 冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究 (1962)
第 15 冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査 (1962)
第 16 冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査 (1963)
第 17 冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査 (1965)
第 18 冊 小堀遠州の作事 (1965)
第 19 冊 藤原氏の氏家とその院家 (1967)
第 20 冊 名物烈の成立 (1969)
第 21 冊 研究論集Ⅰ (1971)
第 22 冊 研究論集Ⅱ (1973)
第 23 冊 平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査 (1974)
第 24 冊 高山一町並調査報告－ (1974)
第 25 冊 平城京左京三条二坊 (1975)
第 26 冊 平城宮発掘調査報告Ⅶ (1975)
第 27 冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ (1975)
第 28 冊 研究論集Ⅲ (1975)
第 29 冊 木曽奈良井一町並調査報告－ (1975)
第 30 冊 五條一町並調査の記録－ (1976)
第 31 冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ (1977)
第 32 冊 研究論集Ⅳ (1977)
第 33 冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告 (1977)
第 34 冊 平城宮発掘調査報告Ⅸ (1977)
第 35 冊 研究論集Ⅴ (1978)
第 36 冊 平城宮整備調査報告Ⅰ (1978)
第 37 冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ (1979)
第 38 冊 研究論集Ⅵ (1979)
第 39 冊 平城宮発掘調査報告Ⅹ (1980)
第 40 冊 平城宮発掘調査報告Ⅺ (1981)
第 41 冊 研究論集Ⅶ (1984)
第 42 冊 平城宮発掘調査報告Ⅻ (1984)
第 43 冊 日本における近世民家（農家）の系統的発展 (1984)
第 44 冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告 (1985)
第 45 冊 薬師寺発掘調査報告 (1986)
第 46 冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書 (1988)
第 47 冊 研究論集Ⅷ (1988)
第 48 冊 年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－ (1990)
第 49 冊 研究論集Ⅸ (1990)
第 50 冊 平城宮発掘調査報告書ⅩⅢ (1990)
第 51 冊 平城宮発掘調査報告書ⅩⅣ (1992)
第 52 冊 西隆寺発掘調査報告書 (1992)
第 53 冊 平城宮朱雀門の復原的研究 (1993)
第 54 冊 平城京左京二条二坊・三条二坊－長屋王邸・藤原麻呂邸－発掘調査報告 (1994)
第 55 冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ －飛鳥水落遺跡の調査－ (1994)
第 56 冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告 (1997)
第 57 冊 日本の信仰遺跡 (1998)
第 58 冊 研究論集Ⅹ (1999)
第 59 冊 中世瓦の研究 (1999)
第 60 冊 研究論集Ⅺ (1999)
第 61 冊 研究論集Ⅻ (2000)
第 62 冊 史跡頭塔発掘調査報告 (2000)
第 63 冊 山田寺発掘調査報告 (2001)
第 64 冊 研究論集ⅩⅢ (2001)
第 65 冊 文化財論叢Ⅲ　奈良文化財研究所創立五十周年記念論文集 (2002)
第 66 冊 研究論集ⅩⅣ (2002)
第 67 冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告　旧石器時代編［法華寺南遺跡］(2002)
第 68 冊 吉備池廃寺発掘調査報告 百済大寺跡の調査 (2002)
第 69 冊 平城宮発掘調査報告ⅩⅤ (2002)

奈良文化財研究所史料

第 1 冊 南無阿弥陀仏作善集（複製）(1954)
第 2 冊 西大寺叡尊伝記集成 (1955)
第 3 冊 仁和寺史料　寺誌編 1 (1963)
第 4 冊 俊乗坊重源史料集成 (1964)
第 5 冊 平城宮木簡 1　図版 (1966)
第 6 冊 仁和寺史料　寺誌編 2 (1967)
第 5 冊 平城宮木簡 1　解説（別冊）(1969)
第 7 冊 唐招提寺史料Ⅰ (1970)
第 8 冊 平城宮木簡 2　図版・解説 (1974)
第 9 冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ (1974)
第 10 冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ (1975)
第 11 冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ (1976)
第 12 冊 藤原宮木簡 1　図版・解説 (1977)
第 13 冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ (1977)
第 14 冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ (1978)
第 15 冊 東大寺文書目録第 1 巻 (1978)
第 16 冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ (1979)
第 17 冊 平城宮木簡 3　図版・解説 (1979)
第 18 冊 藤原宮木簡 2　図版・解説 (1979)
第 19 冊 東大寺文書目録第 2 巻 (1979)
第 20 冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ (1980)
第 21 冊 東大寺文書目録第 3 巻 (1980)
第 22 冊 七大寺巡礼私記 (1981)
第 23 冊 東大寺文書目録第 4 巻 (1981)
第 24 冊 東大寺文書目録第 5 巻 (1982)
第 25 冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅰ (1982)
第 26 冊 東大寺文書目録第 6 巻 (1983)
第 27 冊 木器集成図録－近畿古代編－ (1984)
第 28 冊 平城宮木簡 4　図版・解説 (1985)
第 29 冊 興福寺典籍文書目録第 1 巻 (1985)
第 30 冊 山内清男考古資料Ⅰ (1988)
第 31 冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅱ (1988)
第 32 冊 山内清男考古資料 2 (1989)
第 33 冊 山内清男考古資料 3 (1991)
第 34 冊 山内清男考古資料 4 (1991)
第 35 冊 山内清男考古資料 5 (1991)
第 36 冊 木器集成図録－近畿原始編－ (1992)
第 37 冊 梵鐘実測図集成（上）(1992)
第 38 冊 梵鐘実測図集成（下）(1993)
第 39 冊 山内清男考古資料 6 (1993)
第 40 冊 山田寺出土建築部材集成 (1994)
第 41 冊 平城京木簡 1 (1994)
第 42 冊 平城宮木簡 5 (1995)
第 43 冊 山内清男考古資料 7 (1995)
第 44 冊 興福寺典籍文書目録第 2 巻 (1995)
第 45 冊 北浦定政関係資料 (1996)
第 46 冊 山内清男考古資料 8 (1996)
第 47 冊 北魏洛陽永寧寺 (1997)
第 48 冊 発掘庭園資料 (1997)
第 49 冊 山内清男考古資料 9 (1997)
第 50 冊 山内清男考古資料 10 (1998)
第 51 冊 山内清男考古資料 11 (1999)
第 52 冊 地域文化財の保存修復　考え方と方法 (1999)
第 53 冊 平城京木簡 2　長屋王家木簡 2 (2000)
第 54 冊 山内清男考古資料 12 (2000)
第 55 冊 法隆寺古絵図集 (2001)
第 56 冊 法隆寺考古資料 (2001)
第 57 冊 日中古代都城図録 (2002)
第 58 冊 山内清男考古資料 13 (2002)
第 59 冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ (2002)
第 60 冊 平城京条坊総合地図 (2002)
第 61 冊 鞏義黄冶唐三彩 (2002)
第 62 冊 北浦定政関係資料　松の落ち葉 1 (2002)

奈良文化財研究所基準資料

第 1 冊 瓦編 1　解説 (1973)
第 2 冊 瓦編 2　解説 (1974)
第 3 冊 瓦編 3　解説 (1975)
第 4 冊 瓦編 4　解説 (1976)
第 5 冊 瓦編 5　解説 (1976)
第 6 冊 瓦編 6　解説 (1978)
第 7 冊 瓦編 7　解説 (1979)
第 8 冊 瓦編 8　解説 (1980)
第 9 冊 瓦編 9　解説 (1983)

飛鳥資料館図録

第 1 冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 (1976)
第 2 冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文篇 (1976)
第 3 冊 日本古代の墓誌 (1977)
第 4 冊 日本古代の墓誌　銘文篇 (1978)
第 5 冊 古代の誕生仏 (1978)
第 6 冊 飛鳥時代の古墳－高松塚とその周辺－ (1979)
第 7 冊 日本古代の鴟尾 (1980)
第 8 冊 山田寺展 (1981)
第 9 冊 高松塚拾年 (1982)

第10冊 渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－(1983)
第11冊 飛鳥の水時計(1983)
第12冊 小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－(1983)
第13冊 藤原－半世紀にわたる調査と研究－(1984)
第14冊 日本と韓国の塑像(1985)
第15冊 飛鳥寺(1985)
第16冊 飛鳥の石造物(1986)
第17冊 萬葉乃衣食住(1987)
第18冊 壬申の乱(1987)
第19冊 古墳を科学する(1988)
第20冊 聖徳太子の世界(1988)
第21冊 仏舎利埋納(1989)
第22冊 法隆寺金堂壁画飛天(1989)
第23冊 日本書紀を掘る(1990)
第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察(1991)
第25冊 飛鳥の源流(1991)
第26冊 飛鳥の工房(1992)
第27冊 古代の形(1994)
第28冊 蘇我三代(1995)
第29冊 斉明紀(1996)
第30冊 遺跡を測る(1997)
第31冊 それからの飛鳥(1998)
第32冊 UTAMAKURA(1998)
第33冊 幻のおおでら－百済大寺(1998)
第34冊 鏡を作る　海獣葡萄鏡を中心として(1999)
第35冊 あすかの石造物(1999)
第36冊 飛鳥池遺跡(2000)
第37冊 遺跡を探る(2001)
第38冊 ‘あすか－以前，(2002)
第39冊 Ａ０の記憶(2002)

飛鳥資料館カタログ

第 1 冊 仏教伝来飛鳥への道(1975)
第 2 冊 飛鳥の寺院遺跡１－最近の出土品(1975)
第 3 冊 飛鳥の仏像(1978)
第 4 冊 桜井の仏像(1979)
第 5 冊 高取の仏像(1980)
第 6 冊 橿原の仏像(1981)
第 7 冊 飛鳥の王陵(1982)
第 8 冊 大官大寺－飛鳥最大の寺－(1985)
第 9 冊 高松塚の新研究(1992)
第10冊 飛鳥の一と－最近の調査から－(1994)
第11冊 山田寺(1997)
第12冊 山田寺東回廊再現(1997)
第13冊 飛鳥のイメージ(2001)

その他の刊行物（2002年度）

奈良文化財研究所紀要2002
奈文研ニュースNo.5
奈文研ニュースNo.6
奈文研ニュースNo.7
奈文研ニュースNo.8
埋蔵文化財ニュース109（唐三彩関係文献目録）
埋蔵文化財ニュース110（遺跡学をめざした遺跡の保存と活用に関する研究集会）
埋蔵文化財ニュース111（官衙遺跡整備状況）
埋蔵文化財ニュース112（2001年度埋蔵文化財統計資料）
埋蔵文化財ニュース113（環境考古学３ 大型哺乳類骨格図譜）
「古代庭園に関する調査研究」（平成13年度）報告書
「東大寺転害門調査報告書」
「木造建造物の保存修復のあり方と手法」
重要文化財民家保存修復資料
奈良文化財研究所五十年史　図版編
古代建築研究の新たな展開（奈良文化財研究所創立50周年記念シンポジウム）
興福寺第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅳ
大極殿関係史料（稿）（１）儀式書編
報告書作成の手引（報告書の体裁・挿図・図版）
古代官衙・集落と墨書土器（墨書土器の機能と性格をめぐって）
古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編
飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(16)
宮内庁所蔵金銅製四環壺の調査
東アジア金属工芸史の研究３　山宮神社蔵鏡図録
東アジア金属工芸史の研究４　都萬神社蔵鏡図録
奈良文化財研究所創立50周年記念　飛鳥・藤原京展（奈良文化財研究所編集）
奈良の都を掘る－発掘速報展　平城2002－
奈良文化財研究所創立50周年記念国際講演会 東アジアの古代都城要旨集

図書・写真資料（2003年3月31日現在）

図書：219,177冊

単位：冊

区　分	種　別	購　入	寄　贈	計
2002年度	和漢書	2,305	10,326	12,631
	洋書	83	79	162
累計	和漢書	68,976	140,623	209,599
	洋書	6,456	3,122	9,578

写真：758,362点

データベース一覧

木簡データベース
全国遺跡データベース
古代・地方官衙・居宅・寺院関係遺跡文献データベース
発掘庭園データベース（和文・英文）
図書データベース
薬師寺典籍文書データベース
報告書抄録データベース

人事異動（2002.4.1～2003.3.31）

● 2002年4月1日付け

協力調整官　岡村　道雄
管理部文化財情報課長　花﨑　仁敬
管理部文化財情報課課長補佐　大山　達夫
管理部管理課会計係長　東部　浩志
管理部文化財情報課普及・資料係長　西　外喜夫
管理部文化財情報課図書・情報係長　藤原　誠
文化遺産研究部建造物研究室長　清水　真一
埋蔵文化財センター保存修復工学研究室長　松本　修自
文化遺産研究部建造物研究室　清水　重敦
平城宮跡発掘調査部遺構調査室　山本　紀子
東京文化財研究所修復技術部応用技術研究室長　内田　昭人
文化庁文化財部建造物課主任文化財調査官　村田　健一
文化庁文化財部記念物課文化財調査官　玉田　芳英
独立行政法人国立美術館国立国際美術館庶務課長　梅田　和男
京都大学学生部教務課課長補佐　林　晴夫

● 2002年5月1日付け

飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室　市　大樹
文化庁文化財部記念物課　山下信一郎

● 2002年7月1日付け

平城宮跡発掘調査部史料調査室　山本　崇

● 2002年10月1日付け

文化遺産研究部長　綾村　宏
　文化遺産研究部歴史研究室長併任
管理部管理課会計係　石田　勇
平城宮跡発掘調査部考古第三調査室　林　正憲
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室　渡辺　丈彦
富山大学人文学部教授　黒崎　直
大阪大学経理部主計課予算第三掛主任　江川　正

● 2003年1月1日付け

管理部業務課長　山内　浩一
鳴門教育大学総務部庶務課長　山﨑　哲朗

● 2003年3月31日付け

定年退職　沢田　正昭
定年退職　西村　康
定年退職　中西　建夫
辞　職　平澤麻衣子

予算等

予算(予定額)

単位:千円

	２００２年度	(参考)２００３年度
文部科学省からの運営費交付金(人件費を除く)	1,198,637	1,177,304
自己収入(入場料等)　予定額	13,966	14,106
計	1,212,603	1,191,410

土地と建物

単位:m^2

	土　地	建 物 (建面積／延面積)	建 築 年
本館地区	8860.13	2754.25/6754.86	1964年ほか
平城宮跡資料館地区	※	10630.53 / 16149.67	1970年ほか
飛鳥藤原宮跡発掘調査地区	20515.03	5533.23 / 8006.96	1988年ほか
飛鳥資料館地区	17092.93	2353.84 / 4381.30	1974年ほか

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費補助金 (2003年4月30日現在)

単位:千円

研　究　種　目	２００２年度		(参考)２００３年度	
	件数	金　額	件数	金　額
特別推進研究	1	39,000	—	—
特定領域研究	1	8,600	1	17,800
基盤研究(S)	—	—	1	15,470
基盤研究(A)	4	43,290	5	53,820
基盤研究(B)	5	24,200	5	15,600
基盤研究(C)	9	7,200	9	7,000
若手研究(B)	9	7,100	9	8,500
特別研究員奨励費	1	1,200	—	—
研究成果公開促進費	—	—	1	3,500

職員一覧（独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所）

- 奈良文化財研究所長　町田　章
  - 管理部長　中川良和
    - 管理課長　筏津隆広
      - 課長補佐　長谷川功
        - 庶務係長　桑原隆佳　　補佐員　大西和子／岩永恵子／新宮恵子／松森左千子／北川美樹
        - 会計係長　東部浩司 ― 会計係主任　石田　勇　　補佐員　井野由宜子／上村敬子
        - 用度係長　牧野弘之　　補佐員　港　悦子／永井和代／幸田恵里子
        - 専門職員（併任）　飯田信男
        - 専門職員　松本正典
      - 専門員　櫻井雅樹
    - 業務課長　山内浩一
      - 課長補佐　大塚真琴
        - 研修・事業係長　吉田善弘
        - 施設係長　松井敏夫 ― 施設係主任　上垣内茂樹
        - 専門職員　飯田信男　　補佐員　奥村　功
    - 文化財情報課長　花崎仁敬
      - 課長補佐　大山達夫
        - 普及・資料係長　西　外喜夫　　補佐員　長田典子
        - 図書・情報係長　藤原　誠　　補佐員　中垣睦美／伊藤久美／佐渡早百合／井村智恵子／中埜　博
        - 専門職員　車井俊也
    - 文化財情報発信専門官　千田剛道　　補佐員　石川千恵子
  - 協力調整官　毛利光俊彦
  - 文化遺産研究部長　綾村　宏
    - 建造物研究室長　清水真一 ― 清水重敦／（併任）箱崎和久／（併任）西山和宏
    - 歴史研究室長（併任）　綾村　宏 ― 吉川　聡／（併任）馬場　基／（併任）市　大樹
    - 遺跡研究室長　高瀬要一 ― （併任）内田和伸／（併任）中島義晴
    - 主任研究官　小野健吉
  - 平城宮跡発掘調査部長　岡村道雄
    - 考古第一調査室長　井上和人 ― 豊島直博
    - 考古第二調査室長　川越俊一 ― 金田明大／神野　恵
    - 考古第三調査室長　深澤芳樹 ― 清野孝之／今井晃樹／林　正憲
    - 遺構調査室長　島田敏男 ― 中島義晴／金井　健／山本紀子／大林　潤
    - 史料調査室長　渡邊晃宏 ― 馬場　基／山本　崇
    - 写真資料調査室長（併任）　岡村道雄
      - 専門職員　井上直夫
      - 専門職員　牛嶋　茂 ― 中村一郎
    - 宮跡整備指導専門官　渡邊康史
    - 主任研究官　次山　淳／高橋克壽
  - 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長　金子裕之
    - 考古第一調査室長　安田龍太郎 ― 渡辺丈彦　　補佐員　吉岡佐和子／木寅貢志／山田昇司／小谷徳彦／前岡孝彰／冨永里菜／竹内　亮／筧　和也／飛田恵美子／渡部圭一郎
    - 考古第二調査室長　松村恵司 ― 石橋茂登
    - 遺構調査室長　西口壽生 ― 箱崎和久
    - 史料調査室長　山崎信二 ― 市　大樹
    - 主任研究官　村上　隆／花谷　浩／小池伸彦／小澤　毅／内田和伸
    - 専門員（併任）　櫻井雅樹
    - 専門職員（併任）　井上直夫
    - 専門職員（併任）　松本正典
  - 飛鳥資料館長（事務取扱）　町田　章
    - 学芸室長　岩本圭輔 ― 西山和宏　　補佐員　大谷照子／米川まち子／江川あらた
    - 主任研究官　杉山　洋
    - 専門職員（併任）　車井俊也
  - 埋蔵文化財センター長　田辺征夫
    - 遺物調査技術研究室長　松井　章
    - 遺跡調査技術研究室長　山中敏史
    - 古環境研究室長　光谷拓実 ― 大河内隆之
    - 保存修復科学研究室長　肥塚隆保 ― 降幡順子
    - 保存修復工学研究室長　松本修自
    - 文化財情報研究室長　小林謙一
    - 国際遺跡研究室長　巽　淳一郎
    - 主任研究官　森本　晋／高妻洋成
    - 専門職員（併任）　牛嶋　茂

2003.5.16現在